

## **Oracle® Business Intelligence**

インストール・ガイド

10g リリース 2 (10.1.2) for Solaris Operating System (x86) and  
Solaris Operating System (x86-64)

**部品番号 : E05376-01**

2007 年 6 月

Oracle Business Intelligence インストール・ガイド, 10g リリース 2 (10.1.2) for Solaris Operating System (x86) and Solaris Operating System (x86-64)

部品番号 : E05376-01

原本名 : Oracle Business Intelligence Installation Guide, 10g Release 2 (10.1.2) for Solaris Operating System (x86) and Solaris Operating System (x86-64)

原本部品番号 : B25857-01

Copyright © 2006, Oracle. All rights reserved.

#### 制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

#### U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかるとして使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性 (redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle、JD Edwards、PeopleSoft、Siebel は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性があり得ます。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

---

---

# 目次

はじめに .....	v
対象読者 .....	vi
ドキュメントのアクセシビリティについて .....	vi
関連ドキュメント .....	vi
表記規則 .....	vi
JGoodies 社の使用許諾契約 .....	vii
サポートおよびサービス .....	vii
<b>1 インストールを開始する前の考慮事項</b>	
1.1 Oracle Business Intelligence の概要 .....	1-2
1.1.1 Oracle Business Intelligence Discoverer Plus .....	1-2
1.1.2 Oracle Business Intelligence Discoverer Viewer .....	1-2
1.1.3 Oracle Business Intelligence Discoverer Portlet Provider および Discoverer ポートレット .....	1-3
1.1.4 Reports Services .....	1-3
1.2 Oracle ホームの考慮事項 .....	1-3
1.2.1 Oracle ホーム .....	1-4
1.2.2 複数の Oracle Business Intelligence のインストール .....	1-4
1.2.3 Oracle Business Intelligence のインストールと Oracle データベース .....	1-4
1.3 インストール前の作業 .....	1-4
1.3.1 一般的なチェックリスト .....	1-5
1.3.2 ロケールの設定 .....	1-5
1.3.3 コンポーネントに固有なインストール前の作業 .....	1-5
1.3.3.1 Oracle Business Intelligence Discoverer Plus のインストール前の作業 .....	1-5
1.3.3.2 Oracle Business Intelligence Discoverer Viewer のインストール前の作業 .....	1-5
1.3.3.3 Oracle Business Intelligence Discoverer Portlet Provider および Discoverer ポートレットのインストール前の作業 .....	1-5
1.3.3.4 Reports Services のインストール前の作業 .....	1-5
1.3.4 インストール時に必要な情報 .....	1-6
1.4 インストーラの概要 .....	1-6
1.4.1 インストーラが使用するディレクトリ .....	1-6
1.4.1.1 インストーラ・インベントリ・ディレクトリ .....	1-6
1.4.2 インストーラによる前提条件チェック .....	1-7
<b>2 Oracle Business Intelligence の要件</b>	
2.1 ハードウェア要件 .....	2-2
2.2 ソフトウェア要件 .....	2-5

2.3	Solaris 10 のリソース制御 .....	2-7
2.4	データベース要件 .....	2-8
2.4.1	最新の OLAP パッチのダウンロード .....	2-8
2.4.2	OPTIMIZER_FEATURES_ENABLE パラメータのデフォルトの設定の受入れ .....	2-9
2.5	ブラウザ要件 .....	2-9
2.6	その他のソフトウェア要件 .....	2-9

### 3 Reports Services の詳細な要件

3.1	Reports Services で使用される SMTP サーバーの指定について .....	3-2
3.2	CORBA 通信用ポート番号を指定するための新しい要素 .....	3-2
3.3	ハードウェア要件の確認 .....	3-2
3.3.1	同一コンピュータで複数のインスタンスを実行する場合のメモリー要件 .....	3-5
3.3.2	メモリー使用量を減らすためのヒント .....	3-5
3.4	ソフトウェア要件の確認 .....	3-5
3.5	オペレーティング・システムのパッチ (Solaris) .....	3-7
3.5.1	コンピュータへのオペレーティング・システムのパッチ・リストのインストール .....	3-7
3.5.2	オペレーティング・システムのパッチの確認 .....	3-8
3.6	Solaris 10 のリソース制御 .....	3-8
3.7	カーネル・パラメータ .....	3-9
3.7.1	Solaris のカーネル・パラメータの構成 .....	3-11
3.8	ポート .....	3-12
3.8.1	ポートが使用中かどうかの確認 .....	3-13
3.8.2	デフォルトのポート番号の使用 .....	3-13
3.8.3	カスタム・ポート番号の使用 (静的ポート機能) .....	3-13
3.8.3.1	staticports.ini ファイルのフォーマット .....	3-13
3.8.3.2	エラーが原因でデフォルトのポートが指定したポートにかわって使用される ケース .....	3-15
3.8.3.3	Oracle HTTP Server と OracleAS Web Cache のポート .....	3-16
3.8.3.4	例 .....	3-17
3.8.3.4.1	OracleAS Web Cache をフロントエンドとして使用し、 Oracle HTTP Server でポート 80 と 443 を使用するよう構成する .....	3-18
3.8.3.4.2	OracleAS Web Cache なしで、Oracle HTTP Server でポート 80 と 443 を 使用するよう構成する .....	3-18
3.9	オペレーティング・システム・グループ .....	3-18
3.9.1	インベントリ・ディレクトリ用のグループの作成 .....	3-19
3.9.2	データベース管理者のグループの作成 .....	3-19
3.10	オペレーティング・システム・ユーザー .....	3-20
3.11	環境変数 .....	3-21
3.11.1	環境変数に関するヒント .....	3-21
3.11.2	ORACLE_HOME および ORACLE_SID .....	3-21
3.11.3	PATH、CLASSPATH および LD_LIBRARY_PATH .....	3-21
3.11.4	DISPLAY .....	3-22
3.11.5	TMP と TMPDIR .....	3-22
3.11.6	TNS_ADMIN .....	3-22
3.11.7	REPORTS_DEFAULT_DISPLAY .....	3-23
3.12	/etc/hosts ファイル .....	3-23
3.13	ネットワーク関連トピック .....	3-23
3.13.1	マルチホーム (マルチ IP) コンピュータへのインストール .....	3-24

3.13.2	ハード・ドライブへの CD-ROM または DVD-ROM のコピー、 およびハード・ドライブからのインストール .....	3-24
3.13.3	リモートの CD-ROM/DVD ドライブからのインストール .....	3-25
3.13.4	リモート・コンピュータへのインストール .....	3-26
3.13.5	NFS がマウントされたストレージへのインストール .....	3-27
3.13.6	1つのインストールからの複数のインスタンスの実行 .....	3-28
3.13.7	NIS および NIS+ のサポート .....	3-28
3.13.8	Java 用のフォント・パッケージ .....	3-28
3.13.9	複数のネットワーク・カードを持つコンピュータへのインストール .....	3-28
3.14	インストーラによる前提条件チェック .....	3-28

## 4 Oracle Business Intelligence のインストール

4.1	インストーラの起動 .....	4-2
4.2	Oracle Business Intelligence のインストール .....	4-2
4.3	インストール後の作業 .....	4-5
4.3.1	全般的なチェックリスト .....	4-5
4.3.1.1	更新 .....	4-5
4.3.1.2	TNS 名 .....	4-5
4.3.1.3	ポート番号 .....	4-5
4.3.1.4	Oracle Application Server Infrastructure との関連付け .....	4-6
4.3.2	すべての Discoverer コンポーネントのインストール後の作業 .....	4-6
4.3.2.1	マルチディメンション分析の準備方法 .....	4-6
4.3.2.1.1	Discoverer とともに使用するための Oracle9i Database リリース 2 の 準備方法 .....	4-7
4.3.2.1.2	Discoverer とともに使用するための Oracle Database 10g Enterprise Edition の 準備方法 .....	4-8
4.3.2.1.3	既存の Discoverer カタログを Oracle Database 10g Enterprise Edition リリース 2 に移行する方法 .....	4-8
4.3.2.2	リレーショナル分析の準備方法 .....	4-9
4.3.3	コンポーネントに固有なインストール後の作業 .....	4-9
4.3.3.1	Discoverer のインストール後の作業 .....	4-9
4.3.3.1.1	分析の準備 .....	4-10
4.3.3.2	Discoverer Viewer のインストール後の作業 .....	4-10
4.3.3.2.1	分析の準備 .....	4-10
4.3.3.2.2	ワークブックの作成 .....	4-10
4.3.3.2.3	SMTP 構成 .....	4-10
4.3.3.3	Discoverer Portlet Provider および Discoverer ポートレットのインストール後の 作業 .....	4-10
4.3.3.3.1	分析の準備 .....	4-10
4.3.3.3.2	リリース 10.1.2 の Oracle Application Server Infrastructure との関連付け .....	4-10
4.3.3.3.3	Discoverer Portlet Provider の登録 .....	4-10
4.4	コンポーネントの起動 .....	4-11
4.4.1	Discoverer Plus の起動 .....	4-11
4.4.2	Discoverer Viewer の起動 .....	4-11
4.4.3	Discoverer Portlet Provider の起動 .....	4-11
4.5	サンプルの使用 .....	4-12
4.6	ユーザー・ドキュメントとヘルプのインストールおよびアクセス .....	4-12
4.6.1	インストール後に Discoverer Plus の翻訳済ヘルプ・ファイルをインストール .....	4-13
4.6.2	インストール後に必要な追加のフォントをインストール .....	4-14

4.7	次の作業 .....	4-14
-----	------------	------

## 5 Oracle Business Intelligence の削除と再インストール

5.1	Oracle Business Intelligence の削除 .....	5-2
5.2	Oracle Business Intelligence の再インストール .....	5-3

### A トラブルシューティング

A.1	始める前に .....	A-2
A.1.1	ハードウェアの要件とインストール前の要件の確認 .....	A-2
A.1.2	リリース・ノートの確認 .....	A-2
A.2	インストールに関するトラブルシューティング .....	A-2
A.3	Discoverer の診断およびロギング・ツールの使用 .....	A-3

### B 非対話型インストールとサイレント・インストール

B.1	非対話型インストール .....	B-2
B.2	サイレント・インストール .....	B-2
B.3	インストール前 .....	B-2
B.4	レスポンス・ファイルの作成 .....	B-3
B.4.1	レスポンス・ファイルの例 .....	B-3
B.5	インストールの開始 .....	B-4
B.6	インストール後 .....	B-4
B.7	サイレント・モードを使用した削除 .....	B-4

### C デフォルトのポート番号

C.1	デフォルトのポート番号を割り当てる方法 .....	C-2
C.2	デフォルトのポート番号 .....	C-2

## 索引

---

---

# はじめに

このマニュアルでは、Oracle Application Server に付属しているスタンドアロン Oracle Business Intelligence の CD-ROM から Oracle Business Intelligence のコンポーネントをインストールする方法について説明します。

## 対象読者

このマニュアルは、スタンドアロン Oracle Business Intelligence の CD-ROM/DVD から Oracle Business Intelligence をインストールする担当ユーザーを対象としています。したがって、システム管理業務を問題なく遂行できるユーザーを想定しています。

## ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML 形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/accessibility/> を参照してください。

### ドキュメント内のサンプル・コードのアクセシビリティについて

スクリーン・リーダーは、ドキュメント内のサンプル・コードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかし JAWS は括弧だけの行を読まない場合があります。

### 外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関しての評価や言及は行っておりません。

## 関連ドキュメント

このマニュアルで参照されているドキュメントおよび Oracle Business Intelligence に関するその他の情報（ホワイトペーパー、ベスト・プラクティス、最新版のドキュメント、その他の関連ドキュメントなど）は、OTN-J（Oracle Technology Network Japan）から入手できます。URL は次のとおりです。

<http://www.oracle.com/technology>

## 表記規則

本文では、次の表記規則を使用します。

規則	意味
太字	太字は、操作に関連するグラフィカル・ユーザー・インタフェース要素、または本文中で定義されている用語および用語集に記載されている用語を示します。
イタリック	イタリックは、特定の値を指定するプレースホルダ変数を示します。
固定幅フォント	固定幅フォントは、パラグラフ内のコマンド、URL、例に記載されているコード、画面に表示されるテキスト、または入力するテキストを示します。
<>	山カッコは、ユーザー指定の名前または値を囲みます。
[]	大カッコは、カッコ内の項目を任意に選択することを表します。
メニュー名   コマンド	縦線は、メニューの選択肢の順序を表します。たとえば、メニューとそのメニューのコマンドを示します。

## JGoodies 社の使用許諾契約

Oracle Business Intelligence には、JGoodies 社のソフトウェアが組み込まれています。このソフトウェアの使用許諾契約は次のとおりです。

Copyright© 2003 JGoodies Karsten Lentzsch.All rights reserved.

Redistribution and use in source and binary forms, with or without modification, are permitted provided that the following conditions are met:

- Redistributions of source code must retain the above copyright notice, this list of conditions and the following disclaimer.
- Redistributions in binary form must reproduce the above copyright notice, this list of conditions and the following disclaimer in the documentation and/or other materials provided with the distribution.
- Neither the name of JGoodies nor the names of its contributors may be used to endorse or promote products derived from this software without specific prior written permission.

THIS SOFTWARE IS PROVIDED BY THE COPYRIGHT HOLDERS AND CONTRIBUTORS "AS IS" AND ANY EXPRESS OR IMPLIED WARRANTIES, INCLUDING, BUT NOT LIMITED TO, THE IMPLIED WARRANTIES OF MERCHANTABILITY AND FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE ARE DISCLAIMED. IN NO EVENT SHALL THE COPYRIGHT OWNER OR CONTRIBUTORS BE LIABLE FOR ANY DIRECT, INDIRECT, INCIDENTAL, SPECIAL, EXEMPLARY, OR CONSEQUENTIAL DAMAGES (INCLUDING, BUT NOT LIMITED TO, PROCUREMENT OF SUBSTITUTE GOODS OR SERVICES; LOSS OF USE, DATA, OR PROFITS; OR BUSINESS INTERRUPTION) HOWEVER CAUSED AND ON ANY THEORY OF LIABILITY, WHETHER IN CONTRACT, STRICT LIABILITY, OR TORT (INCLUDING NEGLIGENCE OR OTHERWISE) ARISING IN ANY WAY OUT OF THE USE OF THIS SOFTWARE, EVEN IF ADVISED OF THE POSSIBILITY OF SUCH DAMAGE.

## サポートおよびサービス

次の各項に、各サービスに接続するための URL を記載します。

### オラクル社カスタマ・サポート・センター

オラクル製品サポートの購入方法、およびオラクル社カスタマ・サポート・センターへの連絡方法の詳細は、次の URL を参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/support/>

### 製品マニュアル

製品のマニュアルは、次の URL にあります。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

### 研修およびトレーニング

研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

<http://www.oracle.co.jp/education/>

### その他の情報

オラクル製品やサービスに関するその他の情報については、次の URL から参照してください。

<http://www.oracle.co.jp>

<http://otn.oracle.co.jp>

---

---

**注意：** ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、Oracle Corporation が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。

---

---

---

---

# インストールを開始する前の考慮事項

この章では、Oracle Business Intelligence とそのインストール前の作業について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- [第 1.1 項「Oracle Business Intelligence の概要」](#)
- [第 1.2 項「Oracle ホームの考慮事項」](#)
- [第 1.3 項「インストール前の作業」](#)
- [第 1.4 項「インストーラの概要」](#)

## 1.1 Oracle Business Intelligence の概要

Oracle Business Intelligence は、各種のコンポーネントで構成される、統合化されたビジネス・インテリジェンス・ソリューションです。この項では、次の Oracle Business Intelligence コンポーネントについて説明します。

- 第 1.1.1 項「Oracle Business Intelligence Discoverer Plus」
- 第 1.1.2 項「Oracle Business Intelligence Discoverer Viewer」
- 第 1.1.3 項「Oracle Business Intelligence Discoverer Portlet Provider および Discoverer ポートレット」
- 第 1.1.4 項「Reports Services」

Oracle Business Intelligence のこれらのコンポーネントは、Oracle Application Server Control によって管理されます。

Oracle Business Intelligence のインストールには次のものが含まれます。

- Distributed Configuration Management
- Oracle Business Intelligence Discoverer
- Oracle Application Server Containers for J2EE
- Oracle Application Server Control
- Oracle Application Server Reports Services
- Oracle Application Server Web Cache
- Oracle HTTP Server
- Oracle Process Manager and Notification Server

Oracle Developer Suite には、ビジネス・インテリジェンス・システムを管理および開発するための補助的な製品（総称して Oracle Business Intelligence Tools と呼ばれる）が付属していません。

### 1.1.1 Oracle Business Intelligence Discoverer Plus

Discoverer Plus は、Oracle の Web ベースによるビジネス・ユーザーを対象としたレポート作成ツールです。このツールは、効率的で簡単に使用できるレポート作成ツールが必要なレポート作成者のために設計されました。

Discoverer Plus には、対話型で効率的なレポート・レイアウト機能やフォーマット機能が用意されており、付加価値分析を介してビジネスの実態を把握できます。1 回のマウス・クリックで、レポートに合計とパーセンテージを追加したり、傾向を早急に見きわめるためのデータ主導のストップライト・フォーマットを追加できます。また、Oracle データベースにすでに備えられている計算機能を利用して、高度な算術および統計分析を追加できます。Discoverer Plus では、これらの機能が、組込み計算ウィザードを使用することで簡単に実行されます。

Discoverer Plus OLAP および Discoverer Plus Relational は、OLAP およびリレーショナル・データソースの両方に対して、同じように簡単に使用できるレポート作成環境をそれぞれ提供しています。

Discoverer Plus の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

### 1.1.2 Oracle Business Intelligence Discoverer Viewer

Discoverer Viewer は、ビジネス・ユーザーを考慮して特別に設計されています。簡単に使用できる単純な HTML ユーザー・インタフェースによって、ユーザーは標準的な Web ブラウザからレポートにアクセスできます。このために、他のソフトウェアをデスクトップ上にインストールする必要はありません。

Discoverer Viewer を使用すると、Discoverer Plus および Discoverer Desktop で作成したワークシートのデータを分析できます。(たとえば、アイテムを再配置することで) ワークシートをパーソナライズし、その変更内容を保存できます。

Discoverer Viewer の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Viewer ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

### 1.1.3 Oracle Business Intelligence Discoverer Portlet Provider および Discoverer ポートレット

Discoverer Portlet Provider によって、ユーザーは Discoverer の既存のレポートを OracleAS Portal に公開できるため、レポートおよび業績の指標を追跡するセキュアでパーソナライズされたダッシュボードを簡単に作成できます。

Discoverer Portlet Provider によって、Portal ユーザーは次の Discoverer ポートレットを公開できます。

- ワークシートのリスト・ポートレット
- ワークシート・ポートレット
- ゲージ・ポートレット

Portal ユーザーは、(たとえば、ストップライト・フォーマットを追加することで) 各自の Discoverer ポートレットをパーソナライズし、その変更内容を保存できます。

**注意:** Discoverer Portlet Provider を使用するには、インストールの後で Discoverer システムを Oracle Application Server のメタデータ・リポジトリ (リリース 10.1.2) に関連付ける必要があります (詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照)。

### 1.1.4 Reports Services

Oracle Application Server Reports Services は、品質の高いエンタープライズ・レポートを作成および公開するための、使いやすく、スケーラブルで、管理しやすいソリューションです。Oracle Reports を使用すると、複数のソースから生成されたデータを様々な形式 (ペーパー・レイアウト、Web、データ交換形式など) で公開できます。これにより、データを柔軟に提示できます。

---

---

**注意:** Reports Services には、Report Builder は含まれません。

---

---

Reports Services の要件の詳細は、[第 3 章「Reports Services の詳細な要件」](#)を参照してください。

## 1.2 Oracle ホームの考慮事項

この項では、単一の Oracle ホーム・ディレクトリでの Oracle 製品の共存について説明し、単一のコンピュータに複数の Oracle 製品をインストールする際のガイドラインを提供します。この項の内容は次のとおりです。

- [第 1.2.1 項「Oracle ホーム」](#)
- [第 1.2.2 項「複数の Oracle Business Intelligence のインストール」](#)
- [第 1.2.3 項「Oracle Business Intelligence のインストールと Oracle データベース」](#)

## 1.2.1 Oracle ホーム

Oracle ホームは、Oracle ソフトウェアをインストールする最上位ディレクトリです。Oracle Business Intelligence は次のディレクトリにインストールできます。

- 新しい Oracle ホーム
- Oracle Business Intelligence Tools をインストールしたときに作成された既存の Oracle ホーム

Oracle Business Intelligence 10g (10.1.2) では、同じ Oracle ホームを次の製品と共有できません。

- 以前のバージョンの Oracle Business Intelligence コンポーネントまたは Oracle Developer Suite
- Oracle データベース・インストール
- Oracle Application Server の Forms Service および Reports Service の 10g スタンドアロン・サーバー・インスタンス

## 1.2.2 複数の Oracle Business Intelligence のインストール

Oracle Business Intelligence 10g (10.1.2) の複数のインスタンスを同じコンピュータにインストールする場合は、次のガイドラインが適用されます。このガイドラインは、すでに Oracle Application Server がインストールされているコンピュータに Oracle Business Intelligence 10g (10.1.2) をインストールする場合にも適用されます。

- すべてのインストールを処理できる十分なディスク領域が確保されていることを確認します。ディスク領域の要件を判断するには、[第 2.1 項「ハードウェア要件」](#)を参照してください。
- 後続のインスタンスを前のインスタンスとは異なる Oracle ホーム・ディレクトリにインストールします。

## 1.2.3 Oracle Business Intelligence のインストールと Oracle データベース

Oracle Business Intelligence は、Oracle データベースと同じコンピュータにインストールできます（必須ではありません）。Oracle データベースがすでにインストールされている（または、インストール予定の）コンピュータに、Oracle Business Intelligence をインストールする場合は、次の点に注意してください。

- 両方のインストールを処理できる十分なディスク領域が確保されていることを確認します。該当する Oracle データベース・インストレーション・ガイドおよびこのマニュアルの[第 2.1 項「ハードウェア要件」](#)を参照し、必要な合計ディスク領域を判断してください。
- Oracle データベースとは異なる Oracle ホーム・ディレクトリに Oracle Business Intelligence をインストールします。

**注意:** Oracle Business Intelligence と Oracle データベースは、Oracle ホームを共有できません。

## 1.3 インストール前の作業

Oracle Business Intelligence をインストールする前に、Oracle Business Intelligence のリリース・ノートを確認してください。

Oracle Business Intelligence のインストール前の作業は、次のように分類されます。

- [第 1.3.1 項「全般的なチェックリスト」](#)
- [第 1.3.2 項「ロケールの設定」](#)
- [第 1.3.3 項「コンポーネントに固有なインストール前の作業」](#)
- [第 1.3.4 項「インストール時に必要な情報」](#)

### 1.3.1 一般的なチェックリスト

コンピュータには、必ずローカル管理者グループのメンバーでログインしてください。

すべての Oracle サービスまたは Oracle プロセスを停止し、動作中の他のアプリケーションをすべて閉じます。

### 1.3.2 ロケールの設定

インストーラのユーザー・インタフェース言語は、動作環境ロケールに基づいた Java Virtual Machine (JVM) ロケールの設定に基づいています。特定のロケールでインストーラを実行するには、インストーラを起動する前に、動作環境のロケールを設定します。

表 1-1 には、インストーラでサポートされるロケール言語が示されています。

表 1-1 インストーラでサポートされるロケール言語

言語	ISO-639 言語コード
英語	en
フランス語	fr
ドイツ語	de
イタリア語	it
日本語	ja
韓国語	ko
ポルトガル語 (ブラジル)	pt_BR
簡体字中国語	zh_CN
繁体字中国語	zh_TW

### 1.3.3 コンポーネントに固有なインストール前の作業

ここに記載されていないコンポーネントには、コンポーネントに固有のインストール前の作業はありません。

- 第 1.3.3.1 項「Oracle Business Intelligence Discoverer Plus のインストール前の作業」
- 第 1.3.3.2 項「Oracle Business Intelligence Discoverer Viewer のインストール前の作業」
- 第 1.3.3.3 項「Oracle Business Intelligence Discoverer Portlet Provider および Discoverer ポートレットのインストール前の作業」

#### 1.3.3.1 Oracle Business Intelligence Discoverer Plus のインストール前の作業

なし

#### 1.3.3.2 Oracle Business Intelligence Discoverer Viewer のインストール前の作業

なし

#### 1.3.3.3 Oracle Business Intelligence Discoverer Portlet Provider および Discoverer ポートレットのインストール前の作業

なし

#### 1.3.3.4 Reports Services のインストール前の作業

なし

### 1.3.4 インストール時に必要な情報

インストール・プロセスを構成する画面では、手順のガイドが提供されます。動作環境および選択したインストール・オプションに従って、表 1-2 に記載されている情報が必要です。

表 1-2 インストール・オプション

項目	例
Oracle ホームの名前	BIHome1
Oracle ホームのパス	/oracle/BIHome_1
インスタンス名	BI_admin
インスタンス・パスワード	admin1

## 1.4 インストーラの概要

Oracle Business Intelligence では、Oracle Universal Installer (OUI) を使用してコンポーネントをインストールし、環境変数を構成します。インストーラは、インストール・プロセスの各手順のガイドを提供します。

インストーラでは、異なる動作環境ごとにインストール・オプションの選択が自動化され、環境変数や構成設定を新しく設定したり、事前定義済みの環境変数や構成設定を検出できます。また、既存の製品を削除にもインストーラを使用します。

### 1.4.1 インストーラが使用するディレクトリ

インストーラは、次の表に記載されているディレクトリにファイルを書き込みます。

表 1-3 ディレクトリの場所と要件

ディレクトリ	要件
Oracle ホーム・ディレクトリ	Oracle Business Intelligence ファイルが格納されます。このディレクトリは、Oracle Business Intelligence をインストールするときに指定します。詳細は、第 1.2 項「Oracle ホームの考慮事項」を参照してください。
インベントリ・ディレクトリ	このディレクトリは、コンピュータにインストールされている Oracle 製品を継続して記録するために使用されます。詳細は、第 1.4.1.1 項「インストーラ・インベントリ・ディレクトリ」を参照してください。

#### 1.4.1.1 インストーラ・インベントリ・ディレクトリ

インベントリ・ディレクトリは、使用しているコンピュータでインストーラが初めて実行されるときに作成されます。インベントリ・ディレクトリには、他のインストール情報に加え、インストーラでインストールした製品の記録が保存されます。使用しているコンピュータに Oracle 製品がすでにインストールされている場合、インベントリ・ディレクトリはすでに存在しています。

インベントリ・ディレクトリについては、次のことに注意してください。

- インベントリ・ディレクトリとその内容は、削除または変更しないでください。削除または変更すると、使用しているコンピュータにインストールした製品をインストーラが検出できなくなる場合があります。
- 使用しているコンピュータに初めて Oracle 製品をインストールすると、インストーラによって、インベントリ・ディレクトリがルート・ディレクトリに oraInventory として自動的に作成されます。

Oracle をインストールするたびに、インベントリ・ディレクトリの /logs サブ・ディレクトリにあるファイルにログが書き込まれます。ログ・ファイルには、次のフォーマットで名前が割り当てられます。

```
installActions year- date_ time.log
```

## 1.4.2 インストーラによる前提条件チェック

インストーラは、インストールを開始する前に、使用しているコンピュータに対し、前提条件を自動的にチェックします。次の表に、インストーラで実行される前提条件チェックを示します。

表 1-4 前提条件チェック

前提条件チェック	参照先
コンピュータで少なくとも 256 色を表示できることの確認	<a href="#">第 2.1 項「ハードウェア要件」</a>
最小 CPU スピードの確認	<a href="#">第 2.1 項「ハードウェア要件」</a>
オペレーティング・システム要件の確認	<a href="#">第 2.2 項「ソフトウェア要件」</a>



---

---

## Oracle Business Intelligence の要件

Oracle Business Intelligence をインストールする前に、使用しているコンピュータが次の各項で説明している要件を満たしていることを確認してください。

- [第 2.1 項「ハードウェア要件」](#)
- [第 2.2 項「ソフトウェア要件」](#)
- [第 2.3 項「Solaris 10 のリソース制御」](#)
- [第 2.4 項「データベース要件」](#)
- [第 2.5 項「ブラウザ要件」](#)
- [第 2.6 項「その他のソフトウェア要件」](#)

Reports Services のインストールの詳細は、[第 3 章「Reports Services の詳細な要件」](#)を参照してください。

## 2.1 ハードウェア要件

Oracle Business Intelligence には、次の最小ハードウェア要件があります。

ハードウェア要件の最新情報は、次の [Oracle MetaLink](http://metalink.oracle.com) サイトを確認してください。

<http://metalink.oracle.com>

表 2-1 に、中間層をホスティングするコンピュータのシステム要件を示します。

**表 2-1 システム要件**

項目	要件
オペレーティング・システム	Solaris x86: Solaris 9 および Solaris 10 Solaris x86-64: Solaris 10 インストーラによるチェック: あり
ネットワーク	Oracle Application Server は、ネットワークに接続されているコンピュータにインストールできます。 インストーラによるチェック: なし
IP	コンピュータの IP アドレスは静的である必要があります。 インストーラによるチェック: なし
ホスト名	ホスト名が、255 文字以内であることを確認してください。
プロセッサ・タイプ	i386 対応 プロセッサのタイプは、次のコマンドを使用して確認できます。 <pre>prompt&gt;/usr/sbin/psrinfo -v</pre> Status of virtual processor 0 as of: 07/03/2006 05:45:42 on-line since 04/18/2006 15:31:30. The i386 processor operates at 2393 MHz, and has an i387 compatible floating point processor インストーラによるチェック: なし
プロセッサ・スピード	450Mhz 以上 プロセッサのタイプは、次のコマンドを使用して確認できます。 <pre>prompt&gt;/usr/sbin/psrinfo -v</pre> Status of virtual processor 0 as of: 07/03/2006 05:45:42 on-line since 04/18/2006 15:31:30. The i386 processor operates at 2393 MHz, and has an i387 compatible floating point processor インストーラによるチェック: なし
ディスク領域	1.5GB 空きディスク領域を確認するには、 <b>df</b> コマンドを使用します。 <pre>prompt&gt; df -h dir</pre> <i>dir</i> は、Oracle ホーム・ディレクトリ、または Oracle ホーム・ディレクトリが存在しない場合はその親ディレクトリに置き換えます。たとえば、Oracle Application Server を /opt/oracle/infra にインストールする場合は、 <i>dir</i> を /opt/oracle または /opt/oracle/infra に置換できます。 インストーラによるチェック: なし

表 2-1 システム要件 (続き)

項目	要件
メモリー	<p>1GB</p> <p>メモリー容量を確認するには、次のコマンドを入力します。</p> <pre># /usr/sbin/prtconf   grep "Memory size"</pre> <p><b>注意:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>インストーラによって、コンピュータのメモリー容量がチェックされ、コンピュータが最小メモリー要件を満たしていない場合は警告が表示されます。</li> <li>これらの値は、コンピュータごとに1つの Oracle Application Server インスタンスのみを実行している場合を想定しています。</li> </ul> <p>システムにインストールされた物理 RAM のサイズが、必要なサイズより小さな場合は、続行する前に追加メモリーをインストールする必要があります。</p>
仮想メモリー	<p>1535MB</p>
/tmp ディレクトリ領域	<p>/tmp ディレクトリに 400MB のディスク領域</p> <p>/tmp ディレクトリで使用可能な空きディスク領域を確認するには、次のコマンドを入力します。</p> <pre># df -h /tmp</pre> <p>/tmp ディレクトリで使用可能なディスク領域が 400MB 未満の場合は、次の手順のいずれかを実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>/tmp ディレクトリから不要なファイルを削除します。</li> <li>oracle ユーザーの環境を設定するときに、環境変数 TMP および TMPDIR を設定します。</li> <li>/tmp ディレクトリが含まれているファイル・システムを拡張します。ファイル・システムの拡張の詳細は、必要に応じてシステム管理者に問い合せてください。</li> </ul>
使用可能なメモリー	<p>メモリーの総容量要件（前の項目を参照）に加えて、インストール時に、コンピュータに使用可能なメモリーが十分にあることの確認も必要です。</p> <pre># free</pre> <p>次のように出力されます。</p> <pre>total  used    free    shared  buffers  cached Mem:  3734420  3655240  79180   142584  217192   2153260 -/+ buffers/cache:  1284788   2449632 Swap:  4193608    872528   3321080</pre> <p>使用可能なメモリーは、1行目の「free」列の下に示されています。</p> <p><b>インストーラによるチェック:</b> なし</p>

表 2-1 システム要件 (続き)

項目	要件
スワップ領域	<p>1.5GB 以上の使用可能なスワップ領域</p> <p>使用可能なスワップ領域の大きさを確認するには、次の swap コマンドを入力します。</p> <pre># /usr/sbin/swap -l       swapfile          dev  swaplo  blocks  free /dev/dsk/c0t0d0s1    29,1025      8 4194288 4194288</pre> <p>「free」列に表示される値は、空きブロックの数を示しています。また、1 ブロックの値は 512 バイトです。ブロックを KB に変換するには、ブロック数を 2 で割ります。たとえば、空きブロック 2,000,000 は 1,000,000KB と等価です。</p> <p>スワップ領域が不十分な場合は、次の作業を実行します。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. root ユーザーとしてログインし、次のようにして空のスワップ・ファイルを作成します。 <pre>prompt&gt; su Password: root_user_password # mkfile sizem swap_file_name</pre> <p>ファイル・サイズを MB で指定するには、値に m を付加します (例、900m)。スワップ・ファイルの最小サイズは、現在使用可能なスワップ領域と必要なスワップ領域の差より大きいことが必要です。たとえば、スワップ領域が 100MB の場合、スワップ・ファイルは少なくとも 1400MB であることが必要です。</p> </li> <li>2. 次のコマンドを使用して、スワップ領域に空のスワップ・ファイルを追加します。 <pre># /usr/sbin/swap -a swap_file_name</pre> </li> <li>3. /etc/vfstab ファイルに次の行を追加します。追加しないと、この新しいスワップ領域は、コンピュータの再起動後に存続しません。 <pre>/path/to/swap/file  - -  swap  - no  -</pre> <p>/path/to/swap/file を、スワップ・ファイルの場所に置き換えます。</p> </li> <li>4. 次のコマンドを使用して、新しいスワップ領域サイズを確認します。 <pre>prompt&gt; /usr/sbin/swap -l</pre> </li> </ol> <p>インストーラによるチェック: あり</p>
モニター	<p>256 色表示</p> <p>モニターの表示機能を確認するには、次のコマンドを実行します。</p> <pre>prompt&gt; /usr/X11R6/bin/xdpyinfo</pre> <p>「depths」の行を検索します。最低 8 (ピクセル当たりのビット数) の深さが必要です。</p>

表 2-1 システム要件 (続き)

項目	要件
サポートされるブラウザ	<p>Oracle Enterprise Manager 10g は、次のブラウザでサポートされています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ SP2 以上が適用された Microsoft Internet Explorer 5.5、6.0 (Microsoft Windows の場合のみ)。</li> <li>■ Netscape 7.2。</li> <li>■ Mozilla 1.7。Mozilla は <a href="http://www.mozilla.org">http://www.mozilla.org</a> からダウンロードできます。</li> <li>■ Firefox 1.0.4。Firefox は <a href="http://www.mozilla.org">http://www.mozilla.org</a> からダウンロードできます。</li> <li>■ Safari 1.2 (Apple Macintosh コンピュータ)。</li> </ul> <p>サポートされるブラウザの最新のリストは、次の <a href="http://metalink.oracle.com">Oracle MetaLink</a> のサイトを参照してください。</p> <p><a href="http://metalink.oracle.com">http://metalink.oracle.com</a></p> <p><b>インストーラによるチェック:</b> なし。ただし、サポートされていないブラウザを使用して Oracle Enterprise Manager 10g にアクセスした場合は、警告メッセージが表示されます。</p>
カスタマ・データベース	<p>Oracle Application Server がサポートするカスタマ・データベースは、次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Oracle9i リリース 2 (9.2.0.7 以上)</li> <li>■ Oracle Database 10g リリース 1 (10.1.0.5 以上)</li> </ul>

## 2.2 ソフトウェア要件

Oracle Business Intelligence は、静的 IP アドレスでネットワークに接続されているコンピュータにのみインストールできます。そのためには、コンピュータのホスト名を静的 IP アドレスに構成する必要があります。

インストールの対象となる製品に応じて、次のソフトウェアがシステムにインストールされていることを確認します。表の後に続く手順では、これらの要件が満たされているかどうかを確認する方法について説明します。

---

**注意:** Oracle Universal Installer はシステムをチェックして、指定されている要件を満たしているかどうかを確認します。これらのチェックが問題なく実行されるよう、Oracle Universal Installer を起動する前に要件を確認してください。

---

項目	要件
オペレーティング・システム	<p>Solaris x86: Solaris 9 および Solaris 10</p> <p>Solaris x86-64: Solaris 10</p>

項目	要件
パッケージ	SUNWarc SUNWbtool SUNWhea SUNWlibm SUNWlibms SUNWsprot SUNWtoo SUNWilof SUNWilcs SUNWi15cs SUNWxfnt
	<p><b>注意:</b> ロケールによっては、Java 用の追加フォント・パッケージが必要になる場合もあります。詳細は、次のサイトを参照してください。  <a href="http://java.sun.com/j2se/1.4.2/font-requirements.html">http://java.sun.com/j2se/1.4.2/font-requirements.html</a></p>

システムがこれらの要件を満たしていることを確認するには、次の手順を実行します。

1. インストールされた Solaris のバージョンを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
# uname -r
```

Solaris 9 がインストールされたマシンでは 5.9、Solaris 10 がインストールされたマシンでは 5.10 が出力されます。必要に応じて、オペレーティング・システムをアップグレードする方法について、ご使用のオペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。

2. 必要なパッケージがインストールされているかどうかを確認するには、次のようなコマンドを入力します。

```
# pkginfo -i SUNWarc SUNWbtool SUNWhea SUNWlibm SUNWlibms SUNWsprot
SUNWtoo SUNWilof SUNWilcs SUNWi15cs SUNWxfnt
```

パッケージがインストールされていない場合は、この時点でインストールしてください。パッケージをインストールする方法については、ご使用のオペレーティング・システムまたはソフトウェアのドキュメントを参照してください。

また、次のパッチがシステムにインストールされていることを確認する必要があります。次の表に、これらの要件の確認方法を示します。

---



---

**注意:** これらのパッチについては、より新しいバージョンがシステムにインストールされている場合があります。パッチがインストールされていない場合、ここに記載したバージョンをインストールする前に、より新しいバージョンがインストールされていないかどうかを確認してください。

---



---

インストール・タイプまたは製品	要件
Solaris x86 オペレーティング・システムで Solaris 9 に必要なパッチ	<p>すべてのインストールで、Solaris 9 に必要なパッチは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 111713-06、SunOS 5.9_x86: C++ の共有ライブラリのパッチ</li> <li>■ 111728-03、SunOS 5.9_x86: Math Library (libm) のパッチ</li> <li>■ 112234-12、SunOS 5.9_x86: カーネルのパッチ</li> <li>■ 113986-10、SunOS 5.9_x86: リンカーのパッチ</li> <li>■ 115114-02、SunOS 5.9_x86: アセンブラ用のパッチ</li> <li>■ 116013-02、SunOS 5.9_x86: ps ユーティリティのパッチ (ローカルの Sun ソリューション・センターからのみ入手可能)</li> </ul>
Solaris x86 および Solaris x86-64 オペレーティング・システムで Solaris 10 に必要なパッチ	<p>すべてのインストールで、Solaris 10 に必要なパッチは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 118345-03 SunOS 5.10_x86: ld &amp; libc.so.1 のパッチ</li> <li>■ 119961-02 SunOS 5.10_x86、x64、アセンブラ用のパッチ</li> </ul>

システムがこれらの要件を満たしていることを確認するには、次の手順を実行します。

1. オペレーティング・システムのパッチがインストールされているかどうかを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/patchadd -p | grep patch_number(without version number)
```

たとえば、111713 パッチのいずれかのバージョンがインストールされているかどうかを確認するには、次のコマンドを使用します。

```
# /usr/sbin/patchadd -p | grep 111713
```

オペレーティング・システムのパッチがインストールされていない場合は、次の Web サイトからダウンロードしてインストールしてください。

<http://sunsolve.sun.com>

#### 関連項目：

- オペレーティング・システム要件の詳細は、Oracle Application Server のインストール・ガイドを参照してください。
- オペレーティング・システム要件の最新情報は、Oracle MetaLink サイト (<http://metalink.oracle.com>) で確認してください。

## 2.3 Solaris 10 のリソース制御

Solaris 10 では、System V のすべてのプロセス間通信 (IPC) 機能が、自動的に構成されるか、リソース制御によって処理されます。デフォルト値が増え、リソースが自動的に割り当てられるため、以前はシステムのチューニングが必要だったアプリケーションの多くが自動的に実行できるようになりました。これは、Solaris 10 のデフォルト値が Oracle の推奨値より大きいためです。Oracle が推奨している Solaris 9 のデフォルト値は、表 2-2 に示すように、対応する Solaris 10 のリソース制御に適用されます。

表 2-2 Solaris 9 のカーネル、および対応する Solaris 10 のリソース制御およびデフォルト値

Solaris 9 のカーネル	Solaris 10 のリソース制御	適用されるデフォルト値 (Solaris 9)
seminfo_semmni	project.max-sem-ids	100
seminfo_semmsl	process.max-sem-nsems	256
shminfo_shmmax	project.max-shm-memory	4294967295
shminfo_shmmni	project.max-shm-ids	100

### リソース制御の構成

リソース制御に指定された現在の値を表示し、必要に応じてその値を変更するには、次の手順を実行します。

1. リソース制御の現在の値を表示するには、次のコマンドを入力します。

```
# id -p
project id uid=0(root) gid=0(root) projid=1 (user.root)
```

`id -p` コマンドを実行すると、`project id` が確認されます。

```
# prctl -n project.max-shm-memory -i project user.root
# prctl -n project.max-sem-ids -i project user.root
```

2. 既存のリソース制御の値を変更するには、次のコマンドを入力します。

`max-shm-memory` の値を 6GB に変更するには：

```
# prctl -n project.max-shm-memory -v 6gb -r -i project user.root
```

`max-sem-ids` の値を 256 に変更するには：

```
# prctl -n project.max-sem-ids -v 256 -r -i project user.root
```

## 2.4 データベース要件

Oracle Business Intelligence 10g リリース 2 (10.1.2) は、次のデータベース・バージョンでサポートされています。

- Oracle9i Database リリース 2 (9.2.0.6 以上)
- Oracle Database 10g Enterprise Edition リリース 1 (10.1.0.4 以上)
- Oracle Database 10g Enterprise Edition リリース 2 (10.2.0.1 以上)。動作保証対象となる予定

サポートされているバージョンの最新情報は、<http://metalink.oracle.com> のアプリケーションの動作保証に関する項で確認できます。

### 2.4.1 最新の OLAP パッチのダウンロード

マルチディメンション・データソースをクエリーするときは、特定のデータベース・リリースとパッチのみがサポートされます。最新の OLAP パッチにアクセスする手順は次のとおりです。

1. OracleMetalink (<http://metalink.oracle.com>) にログインします。
2. 「Patches」をクリックします。
3. 「Advanced Search」をクリックします。

4. 「Advanced Search」画面で、各フィールドを次のように入力します。
- **Product or Product Family:** 「Search」アイコンをクリックして、「Search In」フィールドで「Database」と「Tools」を選択します。「View All」をクリックします。表示されるリストから、「Oracle OLAP」をクリックします。
  - **Release:** ドロップダウン・リストから適切なリリース番号を選択します。
  - **Patch Type:** 「Any」を選択します。
  - **Platform or Language:** サイト用のプラットフォームを選択します。
  - 残りのフィールドは空白のままにします。
- 「Go」をクリックするとパッチのリストが表示されます。パッチ名に OLAP が付いているのが OLAP パッチです。

## 2.4.2 OPTIMIZER\_FEATURES\_ENABLE パラメータのデフォルトの設定の受入れ

Oracle データベースを最近アップグレードした場合は、OPTIMIZER\_FEATURES\_ENABLE 初期化パラメータを、以前のリリースのオプティマイザの動作のメンテナンスが可能な値に設定している場合があります。

OracleBI Discoverer Plus OLAP では、最適なパフォーマンスを得るために、最新のデータベース機能を利用しています。OracleBI Discoverer Plus OLAP では、OPTIMIZER\_FEATURES\_ENABLE パラメータを、それぞれのデータベース・リリースのデフォルト値のままにする必要があります (デフォルト値は、9.2.0 など、データベースのリリース番号)。設定を変更すると、予期しない動作を引き起こす場合があります。

OPTIMIZER\_FEATURES\_ENABLE パラメータを明示的に以前のリリースに設定しないでください。実行計画やクエリーのパフォーマンスの問題は、ケース・バイ・ケースで対応してください。

## 2.5 ブラウザ要件

クライアント・コンピュータでの Oracle Business Intelligence には、次のブラウザ要件があります。

表 2-3 ブラウザ要件

項目	要件
Microsoft Internet Explorer	5.5、6.0 およびそれ以上
Netscape	7.1、7.2
Mozilla	1.5 以上
Safari	1.3 以上

サポートされるブラウザの最新情報は、OracleMetaLink サイト (<http://metalink.oracle.com>) を確認してください。

## 2.6 その他のソフトウェア要件

Oracle Business Intelligence には、前述されている以外に、次のソフトウェア要件があります。

表 2-4 その他のソフトウェア要件

項目	要件
Discoverer Viewer	クライアント・マシンで Discoverer Viewer を実行するには、ブラウザで JavaScript および Cookie が有効になっている必要があります。

表 2-4 その他のソフトウェア要件 (続き)

項目	要件
Microsoft Excel	Discoverer Plus Relational を使用して Microsoft Excel にエクスポートするには、Excel 97 (またはそれ以上) が必要です。ワークシートを Microsoft Excel の Web クエリー・フォーマットにエクスポートする場合は、Excel 2000 (またはそれ以上) が必要です。  Discoverer Plus OLAP を使用して Microsoft Excel にエクスポートするには、Excel 2000 (またはそれ以上) が必要です。
JRE	Discoverer Plus を実行するには、次の JRE のいずれか 1 つを使用する必要があります。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Sun Java Plug-in 1.4.2_06 (推奨)</li> <li>■ Oracle JInitiator 1.3.1.22</li> </ul>

/etc/services ファイルを確認して、次のポート範囲がシステムで利用可能であることを確認します。

- Oracle Internet Directory に必要なポート 3060 ~ 3129
- Oracle Internet Directory (SSL) に必要なポート 3130 ~ 3199
- Oracle Enterprise Manager (コンソール) に必要なポート 1812 ~ 1829
- Oracle Enterprise Manager (エージェント) に必要なポート 1830 ~ 1849
- Oracle Enterprise Manager (RMI) に必要なポート 1850 ~ 1869

必要に応じて、/etc/services ファイルからエントリを削除してシステムを再起動します。エントリを削除するには、パッチ 3167528 に格納されている perl スクリプトを使用できます。このパッチは、次のサイトから入手できます。

<http://metalink.oracle.com>

これらのポートを使用できない場合は、関連する Configuration Assistant がインストール中に失敗します。

---

## Reports Services の詳細な要件

Oracle Business Intelligence をインストールする前に、使用しているコンピュータが、この章で説明する Reports Services の要件を満たしていることを確認してください。

この章は次の項で構成されています。

- 第 3.1 項 「Reports Services で使用される SMTP サーバーの指定について」
- 第 3.2 項 「CORBA 通信用ポート番号を指定するための新しい要素」
- 第 3.3 項 「ハードウェア要件の確認」
- 第 3.4 項 「ソフトウェア要件の確認」
- 第 3.5 項 「オペレーティング・システムのパッチ (Solaris)」
- 第 3.6 項 「Solaris 10 のリソース制御」
- 第 3.7 項 「カーネル・パラメータ」
- 第 3.8 項 「ポート」
- 第 3.9 項 「オペレーティング・システム・グループ」
- 第 3.10 項 「オペレーティング・システム・ユーザー」
- 第 3.11 項 「環境変数」
- 第 3.12 項 「/etc/hosts ファイル」
- 第 3.13 項 「ネットワーク関連トピック」
- 第 3.14 項 「インストーラによる前提条件チェック」

## 3.1 Reports Services で使用される SMTP サーバーの指定について

インストール中に、「送信メール・サーバー情報の指定」画面が表示されます。Forms and Reports Services で使用される送信メール (SMTP) サーバーを入力します。

例: smtp.oracle.com

---

**注意:** このフィールドはオプションです。ただし、メール・サーバー情報を構成していないと、レポートを電子メールで配信できません。送信メール・サーバー情報の指定方法の詳細は、『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』を参照してください。

---

## 3.2 CORBA 通信用ポート番号を指定するための新しい要素

Oracle Reports 10g リリース 2 (10.1.2) では、サーバー構成ファイルに ORBPorts という要素が導入されました。これによって、CORBA を介した通信で Reports Server とエンジンが使用するポート番号を明示的に指定できます。ポートは、範囲で指定することも、カンマで区切って個別に指定することもできます。次に例を示します。

```
<ORBPorts value="15000-15010"/> (値の範囲)
```

```
<ORBPorts value="15000,16000,17000,18000"/> (カンマで区切られた値)
```

デフォルトでは、サーバー構成ファイルに ORBPorts 要素が存在しません。この要素がない場合は、Reports Server によって CORBA 通信用のポートがランダムに選択されます。ORBPorts 要素の詳細は、『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』の「OracleAS Reports Services の構成」の章を参照してください。

---

**注意:** ORBPorts 要素は、Reports Server を実行しているサーバーで管理者が TCP ポートのフィルタリングを有効にしている場合にのみ定義する必要があります。ポートのフィルタリングが有効である場合、管理者は Reports Server 用にいくつかのポートを開き、ORBPorts を使用してそれらのポートを Reports Server とエンジンの通信用としてサーバー構成ファイルに指定できます。いずれのポートも使用できない場合は、Reports Server またはエンジンの起動が失敗し、エラーが表示される可能性があります。

---

## 3.3 ハードウェア要件の確認

この項では、Oracle Application Server 10g Forms and Reports Services を実行するためのシステム要件を示します。次にあげる要件の多くはインストール・プロセスの開始時にインストーラでチェックされ、満たされていない場合は警告が表示されます。時間を節約するために、インストーラでチェックされない要件のみを手動でチェックすることができます。インストーラでチェックされない要件については、次の表で確認してください。

インストーラによるシステム・チェックは、インストールを行わなくても実行できます。これには、次に示すように runInstaller コマンドを実行します。runInstaller コマンドは、Oracle Application Server 10g Forms and Reports Services の CD-ROM (Disk 1) または DVD-ROM の application\_server ディレクトリにあります。

CD-ROM :

```
prompt> mount_point/1012disk1/runInstaller -executeSysPrereqs
```

DVD-ROM:

```
prompt> mount_point/application_server/runInstaller -executeSysPrereqs
```

結果はログ・ファイルに書き込まれるとともに、画面に表示されます。

実行されるチェックの種類の詳細は、第 3.14 項「インストーラによる前提条件チェック」を参照してください。

表 3-1 ハードウェア要件

項目	要件
オペレーティング・システム	<p>Solaris x86: Solaris 9 および Solaris 10 Solaris x86-64: Solaris 10</p> <p>インストーラによるチェック: あり</p>
プロセッサ・タイプ	<p>i386 対応</p> <p>プロセッサのタイプは、次のコマンドを使用して確認できます。</p> <pre>prompt&gt;/usr/sbin/psrinfo -v Status of virtual processor 0 as of: 07/03/2006 05:45:42 on-line since 04/18/2006 15:31:30. The i386 processor operates at 2393 MHz, and has an i387 compatible floating point processor</pre> <p>インストーラによるチェック: なし</p>
プロセッサ・スピード	<p>450Mhz 以上</p> <p>プロセッサのタイプは、次のコマンドを使用して確認できます。</p> <pre>prompt&gt;/usr/sbin/psrinfo -v Status of virtual processor 0 as of: 07/03/2006 05:45:42 on-line since 04/18/2006 15:31:30. The i386 processor operates at 2393 MHz, and has an i387 compatible floating point processor</pre> <p>インストーラによるチェック: なし</p>
ネットワーク	<p>Oracle Application Server は、ネットワークに接続されているコンピュータにインストールできます。</p> <p>インストーラによるチェック: なし</p>
IP	<p>コンピュータの IP アドレスは静的である必要があります。</p> <p>インストーラによるチェック: なし</p>
ディスク領域	<p>1.1GB</p> <p>空きディスク領域を確認するには、df コマンドを使用します。</p> <pre># df -h dir</pre> <p><i>dir</i> は、Oracle ホーム・ディレクトリ、または Oracle ホーム・ディレクトリが存在しない場合はその親ディレクトリに置き換えます。たとえば、Oracle Application Server 10g Forms and Reports Services を /opt/oracle/infra にインストールする場合は、<i>dir</i> を /opt/oracle または /opt/oracle/infra に置換できます。</p> <p>インストーラによるチェック: なし</p>
メモリー	<p>512MB</p> <p><b>注意:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ インストーラによって、コンピュータのメモリー容量がチェックされ、コンピュータが最小メモリー要件を満たしていない場合は警告が表示されます。</li> <li>■ これらの値は、コンピュータごとに 1 つの Oracle Application Server インスタンスのみを実行している場合を想定しています。</li> </ul> <p>メモリー容量を確認するには、次のコマンドを実行します。</p> <pre>prompt&gt; # /usr/sbin/prtconf   grep "Memory size"</pre> <p>インストーラによるチェック: あり</p>

表 3-1 ハードウェア要件 (続き)

項目	要件
スワップ領域	<p>1.5GB 以上の使用可能なスワップ領域</p> <p>使用可能なスワップ領域の大きさを確認するには、次の <code>swap</code> コマンドを入力します。</p> <pre># /usr/sbin/swap -l   swapfile          dev  swaplo blocks  free /dev/dsk/c0t0d0s1  29,1025      8 4194288 4194288</pre> <p>「free」列に表示される値は、空きブロックの数を示しています。また、1 ブロックの値は 512 バイトです。ブロックを KB に変換するには、ブロック数を 2 で割ります。たとえば、空きブロック 2,000,000 は 1,000,000KB と等価です。</p> <p>スワップ領域が不十分な場合は、次の作業を実行します。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. <code>root</code> ユーザーとしてログインし、次のようにして空のスワップ・ファイルを作成します。 <pre>prompt&gt; su Password: root_user_password # mkfile sizem swap_file_name</pre> <p>ファイル・サイズを MB で指定するには、値に <code>m</code> を付加します (例、900m)。スワップ・ファイルの最小サイズは、現在使用可能なスワップ領域と必要なスワップ領域の差より大きいことが必要です。たとえば、スワップ領域が 100MB の場合、スワップ・ファイルは少なくとも 1400MB であることが必要です。</p> </li> <li>2. 次のコマンドを使用して、スワップ領域に空のスワップ・ファイルを追加します。 <pre># /usr/sbin/swap -a swap_file_name</pre> </li> <li>3. <code>/etc/vfstab</code> ファイルに次の行を追加します。追加しないと、この新しいスワップ領域は、コンピュータの再起動後に存続しません。 <pre>/path/to/swap/file - - swap - no -</pre> <p><code>/path/to/swap/file</code> を、スワップ・ファイルの場所に置き換えます。</p> </li> <li>4. 次のコマンドを使用して、新しいスワップ領域サイズを確認します。 <pre>prompt&gt; /usr/sbin/swap -l</pre> </li> </ol> <p><b>インストーラによるチェック:</b> あり</p>
TMP 領域	<p><code>/tmp</code> ディレクトリに 400MB のディスク領域</p> <p><code>/tmp</code> ディレクトリで使用可能な空きディスク領域を確認するには、次のコマンドを入力します。</p> <pre># df -h /tmp</pre> <p><code>/tmp</code> ディレクトリで使用可能なディスク領域が 400MB 未満の場合は、次の手順のいずれかを実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <code>/tmp</code> ディレクトリから不要なファイルを削除します。</li> <li>■ <code>oracle</code> ユーザーの環境を設定するときに、環境変数 <code>TMP</code> および <code>TMPDIR</code> を設定します。</li> <li>■ <code>/tmp</code> ディレクトリが含まれているファイル・システムを拡張します。ファイル・システムの拡張の詳細は、必要に応じてシステム管理者に問い合わせてください。</li> </ul>

表 3-1 ハードウェア要件 (続き)

項目	要件
モニター	256 色表示  モニターの表示機能を確認するには、次のコマンドを実行します。 <pre>prompt&gt; /usr/X11R6/bin/xdpyinfo</pre> 「depths」の行を検索します。最低 8 (ピクセル当たりのビット数) の深さが 必要です。
カスタマ・データ ベース	Oracle Application Server がサポートするカスタマ・データベースは、次のと おりです。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Oracle9i リリース 2 (9.2.0.7 以上)</li> <li>■ Oracle Database 10g リリース 1 (10.1.0.5 以上)</li> </ul>

### 3.3.1 同一コンピュータで複数のインスタンスを実行する場合のメモリー要件

OracleAS Infrastructure 10g と中間層を同じコンピュータで実行する場合は、そのコンピュータが第 3.3 項に示すメモリー要件を満たしていることを確認します。

表に示されている値は、少人数のユーザー環境でテストされたものです。ユーザー数が多い場合は、さらに多くのメモリーが必要となる場合があります。

表 3-2 同一コンピュータで複数のインスタンスを実行する場合のメモリー要件

説明	メモリー
OracleAS Infrastructure 10g と J2EE and Web Cache	1GB
OracleAS Infrastructure 10g と Portal and Wireless	1.5GB

### 3.3.2 メモリー使用量を減らすためのヒント

メモリー消費量を減らす必要がある場合は、次の方法をお勧めします。

- 必要なコンポーネントのみを構成します。
- 必要なコンポーネントが含まれる最小の中間層タイプを選択します。
- インストールが終了したら、必要なコンポーネントのみを起動します。詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。
- Application Server Control は、インスタンスの管理が必要な場合のみ実行します。ほとんどの場合、Application Server Control を常時実行する必要はありません。

1 台のコンピュータで複数の Oracle Application Server 10g Forms and Reports Services インスタンスを実行する場合は、個々の Application Server Control がメモリーを大量に消費する可能性があります。Application Server Control を必要なときにのみ実行すれば、他のコンポーネントにメモリーを解放できます。

## 3.4 ソフトウェア要件の確認

インストーラによって、使用するコンピュータに必要なパッチが含まれていることがチェックされます。必要なパッチの一部が存在しない場合は、エラーが表示されます。

次の表では、Solaris x86 (Solaris 9 と Solaris 10) および Solaris x86-64 (Solaris 10) のオペレーティング・システム・パッケージについて説明します。

項目	要件
オペレーティング・システム	Solaris x86: Solaris 9 および Solaris 10 Solaris x86-64: Solaris 10

項目	要件
パッケージ	SUNWarc SUNWbtool SUNWhea SUNWlibm SUNWlibms SUNWsprout SUNWtoo SUNWilof SUNWilcs SUNWi15cs SUNWxfnt
	<p><b>注意:</b> ロケールによっては、Java 用の追加フォント・パッケージが必要になる場合もあります。詳細は、次のサイトを参照してください。</p> <p><a href="http://java.sun.com/j2se/1.4.2/font-requirements.html">http://java.sun.com/j2se/1.4.2/font-requirements.html</a></p>

システムがこれらの要件を満たしていることを確認するには、次の手順を実行します。

1. インストールされた Solaris のバージョンを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
# uname -r
```

Solaris 9 がインストールされたマシンでは 5.9、Solaris 10 がインストールされたマシンでは 5.10 が出力されます。必要に応じて、オペレーティング・システムをアップグレードする方法について、ご使用のオペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。

2. 必要なパッケージがインストールされているかどうかを確認するには、次のようなコマンドを入力します。

```
# pkginfo -i SUNWarc SUNWbtool SUNWhea SUNWlibm SUNWlibms SUNWsprout
SUNWtoo SUNWilof SUNWilcs SUNWi15cs SUNWxfnt
```

パッケージがインストールされていない場合は、この時点でインストールしてください。パッケージをインストールする方法については、ご使用のオペレーティング・システムまたはソフトウェアのドキュメントを参照してください。

また、コンピュータのソフトウェア要件を満たす以外に、対応ブラウザを用意する必要があります。

サポートされているブラウザは次のとおりです。

- Service Pack 2 以上が適用された Microsoft Internet Explorer 5.5、6.0 (Microsoft Windows の場合のみ)。
- Netscape 7.1、7.2。
- Mozilla 1.5。Mozilla は <http://www.mozilla.org> からダウンロードできます。Mozilla ブラウザのスタンドアロン版である Firefox は、現時点では動作が保証されていません。動作が保証されているブラウザの最新情報は、Oracle MetaLink サイト (<http://metalink.oracle.com>) を確認してください。
- Safari 1.2 (Apple Macintosh コンピュータ)。

サポートされるブラウザの最新情報は、Oracle MetaLink サイト (<http://metalink.oracle.com>) を確認してください。

## 3.5 オペレーティング・システムのパッチ (Solaris)

表 3-3 に、Forms and Reports Services の前にインストールする必要がある Solaris x86 (Solaris 9 と Solaris 10) および Solaris x86-64 (Solaris 10) オペレーティング・システムのパッチを示します。パッチは、次のサイトからダウンロードできます。

<http://sunsolve.sun.com>

これらのパッチのインストール手順については、パッチに付属する README ファイルを参照してください。

J2SE Patch Cluster をドメイン名のパッチ (112138-01 以上) とともにインストールすると、すべてのパッチ要件を満たすことができます。

---

**注意:** 表 3-3 に一覧表示されているパッチは、このマニュアルのリリース時には最新のものですが、J2SE に必要なパッチのリストは、Sun 社によって頻繁に更新されます。最新のパッチ・リストを参照するには、次の URL で「Readme」リンクをクリックしてください。  
<http://sunsolve.sun.com/pub-cgi/show.pl?target=patches/J2SE>

---

**表 3-3 Solaris オペレーティング・システムに必要なパッチ**

オペレーティング・システム	必要なパッチ
Solaris x86 オペレーティング・システムで Solaris 9 に必要なパッチ	すべてのインストールで、Solaris 9 に必要なパッチは次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 111713-06、SunOS 5.9_x86: C++ の共有ライブラリのパッチ</li> <li>■ 111728-03、SunOS 5.9_x86: Math Library (libm) のパッチ</li> <li>■ 112234-12、SunOS 5.9_x86: カーネルのパッチ</li> <li>■ 113986-10、SunOS 5.9_x86: リンカーのパッチ</li> <li>■ 115114-02、SunOS 5.9_x86: アセンブラ用のパッチ</li> <li>■ 116013-02、SunOS 5.9_x86: ps ユーティリティのパッチ (ローカルの Sun ソリューション・センターからのみ入手可能)</li> </ul>
Solaris x86 および Solaris x86-64 オペレーティング・システムで Solaris 10 に必要なパッチ	すべてのインストールで、Solaris 10 に必要なパッチは次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 118345-03 SunOS 5.10_x86: ld &amp; libc.so.1 のパッチ</li> <li>■ 119961-02 SunOS 5.10_x86、x64、アセンブラ用のパッチ</li> </ul>

### 3.5.1 コンピュータへのオペレーティング・システムのパッチ・リストのインストール

コンピュータにインストールされているパッチを判断する手順は次のとおりです。

1. `-p` オプションを指定して `showrev` コマンドを実行します。次のコマンドを実行すると、`patchList` というファイルに、ソートされた出力結果が保存されます。

```
prompt> showrev -p | sort > patchList
```

2. テキスト・エディタ (`vi`、`emacs` など) でファイルを開いて、パッチ番号を検索します。

### 3.5.2 オペレーティング・システムのパッチの確認

インストーラにより、必要なパッチのバージョンがコンピュータ上で検索されます。完全一致するものが見つからなかった場合は、インストーラを起動したシェルに警告メッセージが表示されます。

```
CD-ROM: prompt> mount_point/10.1.2disk1/runInstaller
DVD:    prompt> mount_point/application_server/runInstaller
...
Some optional pre-requisite checks have failed. Continue? (y/n) [n] n
```

終了するか続行するかを選択するように求められます。

足りないパッチがあった場合、「n」を入力するとインストーラが終了します。目的のパッチをダウンロードしてインストールしてください。

「y」を入力して続行するのは、必要なパッチがすべてインストールされていることが確認できた場合のみにしてください。

## 3.6 Solaris 10 のリソース制御

Solaris 10 では、System V のすべてのプロセス間通信 (IPC) 機能が、自動的に構成されるか、リソース制御によって処理されます。デフォルト値が増え、リソースが自動的に割り当てられるため、以前はシステムのチューニングが必要だったアプリケーションの多くが自動的に実行できるようになりました。これは、Solaris 10 のデフォルト値が Oracle の推奨値より大きいためです。Oracle が推奨している Solaris 9 のデフォルト値は、表 3-4 に示すように、対応する Solaris 10 のリソース制御に適用されます。

**表 3-4 Solaris 9 のカーネル、および対応する Solaris 10 のリソース制御およびデフォルト値**

Solaris 9 のカーネル	Solaris 10 のリソース制御	適用されるデフォルト値 (Solaris 9)
seminfo_semmni	project.max-sem-ids	100
seminfo_semmsl	process.max-sem-nsems	256
shminfo_shmmax	project.max-shm-memory	4294967295
shminfo_shmmni	project.max-shm-ids	100

#### リソース制御の構成

リソース制御に指定された現在の値を表示し、必要に応じてその値を変更するには、次の手順を実行します。

1. リソース制御の現在の値を表示するには、次のコマンドを入力します。

```
# id -p
project id uid=0(root) gid=0(root) projid=1 (user.root)
```

id -p コマンドを実行すると、project id が確認されます。

```
# prctl -n project.max-shm-memory -i project user.root
# prctl -n project.max-sem-ids -i project user.root
```

2. 既存のリソース制御の値を変更するには、次のコマンドを入力します。

- a. max-shm-memory の値を 6GB に変更するには:

```
# prctl -n project.max-shm-memory -v 6gb -r -i project user.root
```

- b. max-sem-ids の値を 256 に変更するには:

```
# prctl -n project.max-sem-ids -v 256 -r -i project user.root
```

Solaris 10 のチューニングの詳細は、次のサイトを参照してください。

<http://docs.sun.com/app/docs/doc/817-0404/6mg74vs8v?a=view>

## 3.7 カーネル・パラメータ

Forms and Reports Services をインストールするコンピュータでは、カーネル・パラメータを表 3-5 および表 3-6 に示されている最小値に設定する必要があります。

カーネル・パラメータの値は、`/etc/system` ファイルにあります。`/etc/system` ファイルにパラメータが指定されていない場合は、ファイルに行を追加してそれらを指定する必要があります。Solaris 10 では、System V のすべてのプロセス間通信 (IPC) 機能が、自動的に構成されるか、リソース制御によって処理されます。詳細は、第 3.6 項「Solaris 10 のリソース制御」を参照してください。

### 注意：

- カーネル・パラメータの値が必要なのは、Oracle Application Server Metadata Repository または Oracle Application Server Web Cache を実行するコンピュータのみです。カーネル・パラメータの値は、これらのコンポーネントをインストールする場合にのみチェックされます。
- カーネル・パラメータの値が要件を満たしていない場合は、インストーラからエラー・メッセージが表示されます。カーネル・パラメータが必要な値に更新するまでは、インストールを続行できません。
- カーネル・パラメータの値を更新した場合は、新しい値を有効にするためにコンピュータを再起動してください。

表 3-5 OracleAS Web Cache に必要なカーネル・パラメータ

パラメータ	最小値を示す /etc/system 内の行	説明
<code>rlim_fd_max</code>	<code>set rlim_fd_max=65536</code>	シングル・プロセスが開くことのできるファイル記述子の数に関する強い制限を定義します。

表 3-6 OracleAS Metadata Repository に必要なカーネル・パラメータ

パラメータ	最小値を示す /etc/system 内の行	説明
<code>semnmi</code>	<code>set semsys:seminfo_ semnmi=100</code>	システム全体でのセマフォ・セットの最大数を定義します。
<code>semnms</code>	<code>set semsys:seminfo_ semnms=1024</code>	システムでの最大セマフォ数を定義します。256 は、実行するデータベースが 1 つ (インストールする OracleAS Metadata Repository) であるコンピュータでの最小値です。 コンピュータ上ですでにデータベースが稼働している場合は、「 <a href="#">semnms パラメータの最小値を決定するには:</a> 」を参照してください。
<code>semmsl</code>	<code>set semsys:seminfo_ semmsl=256</code>	初回インストールのみを対象とした最小推奨値を定義します。
<code>shmmx</code>	<code>set shmsys:shminfo_ shmmx=4294967295</code>	共有メモリー・セグメント 1 つ当たりの最大許容サイズを定義します (4GB=4294967295)。

表 3-6 OracleAS Metadata Repository に必要なカーネル・パラメータ (続き)

パラメータ	最小値を示す /etc/system 内の行	説明
shmmni	set shmsys:shminfo_ shmmni=100	システム全体での共有メモリー・セグメントの最大数を定義します。

**semnms パラメータの最小値を決定するには：**

Oracle データベースがまだ稼働していないコンピュータに OracleAS Metadata Repository をインストールする場合 (つまり、OracleAS Metadata Repository がコンピュータで稼働する唯一の Oracle データベースになる場合) は、semnms パラメータを最小値の 256 に設定します。

Oracle データベースがすでに稼働しているコンピュータに OracleAS Metadata Repository をインストールする場合は、semnms パラメータの値として、各 Oracle データベース (OracleAS Metadata Repository を含む) の processes 初期化パラメータを合計した数値に、最も大きい初期化パラメータの値を 2 回加算し、その値にさらにデータベースごとに 10 ずつ加算した値を設定します。

OracleAS Metadata Repository データベースの processes パラメータのデフォルト値は 150 です。

例：Oracle データベースがすでに稼働しているコンピュータの processes パラメータが 200 に設定されているとします。この場合、semnms パラメータは少なくとも 770 に設定する必要があります。

- すべての Oracle データベースの processes パラメータの合計：既存のデータベースの 200+ インストールする OracleAS Metadata Repository の 150=350
- 最大のパラメータ値を 2 回加算：200+200=400
- データベースごとに 10 ずつ加算：10+10=20
- 合計：350+400+20=770

Oracle データベースの processes パラメータの値を確認するには、SQL\*Plus で次のコマンドを実行します。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> show parameters processes
```

**カーネル・パラメータの値を追加または更新するには：**

1. 値の変更が必要なコンピュータに、root ユーザーでログオンします。
2. /etc/system ファイルのバックアップ・コピーを作成します。たとえば、次のコマンドを実行すると、system.back というバックアップ・コピーが作成されます。  
  
# cp /etc/system /etc/system.back
3. vi や emacs などのテキスト・エディタを使用して、必要に応じて /etc/system ファイルで値を更新するか、または新しい行を追加します。たとえば、次の行はパラメータのサンプル値を示しています。

```
set semsys:seminfo_semmni=300
set semsys:seminfo_semnms=1024
set semsys:seminfo_semml=256
set shmsys:shminfo_shmmax=4294967295
set shmsys:shminfo_shmmin=1
set shmsys:shminfo_shmmni=512
set shmsys:shminfo_shmseg=150
```

**ヒント：** /etc/system ファイルのコメント文字は、# ではなくアスタリスク (\*) です。

4. 新しい値を有効にするためにコンピュータを再起動します。

### 3.7.1 Solaris のカーネル・パラメータの構成

**注意：** 次の項に示すカーネル・パラメータとシェル制限の値は推奨値にすぎません。本番データベース・システムでは、これらの値をチューニングして、システムのパフォーマンスを最適化することをお勧めします。カーネル・パラメータのチューニング方法の詳細は、ご使用のオペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。

次の表に示されるカーネル・パラメータが、Solaris 8 および Solaris 9 オペレーティング・システムの推奨値以上に設定されていることを確認します。表の後の手順では、値の確認および設定方法について説明しています。

パラメータ	推奨値
noexec_user_stack	1
semsys:seminfo_semmni	100
semsys:seminfo_semmns	1024
semsys:seminfo_semmnl	256
semsys:seminfo_semvmx	32767
shmsys:shminfo_shmmax	4294967295
shmsys:shminfo_shmmin	1
shmsys:shminfo_shmmni	100
shmsys:shminfo_shmseg	10

**注意：** Solaris 9 では、次のパラメータが廃止されています。

- shmsys:shminfo\_shmmin
- shmsys:shminfo\_shmseg

Solaris 10 では、次の表に示されるカーネル・パラメータが推奨値以上に設定されていることを確認します。この表には、特定のカーネル・パラメータの `/etc/system` ファイルに置き換わるリソース制御も示されています。

**注意：** Solaris 10 の場合、System V TPC の実装に `/etc/system` ファイルの変更は必要ありません。Solaris 10 では、その実装にリソース制御機能が使用されるためです。

パラメータ	パラメータを置き換えるリソース制御	推奨値
noexec_user_stack	なし	1
semsys:seminfo_semmni	<code>project.max-sem-ids</code>	100
semsys:seminfo_semmnl	<code>process.max-sem-nsems</code>	256
shmsys:shminfo_shmmax	<code>project.max-shm-memory</code>	4294967295
shmsys:shminfo_shmmni	<code>project.max-shm-ids</code>	100

Solaris 9 では、これらのカーネル・パラメータに指定された現在の値を表示し、必要に応じて変更するために次の手順を実行します。

1. これらのパラメータの現在の値を表示するには、次のコマンドを入力します。

```
# grep noexec_user_stack /etc/system
# /usr/sbin/sysdef | grep SEM
# /usr/sbin/sysdef | grep SHM
```

2. 現在の値を変更する場合は、次の手順を実行します。

- a. /etc/system ファイルのバックアップ・コピーを作成します。次に例を示します。

```
# cp /etc/system /etc/system.orig
```

- b. 任意のエディタで /etc/system ファイルを開き、必要に応じて、次のような行を追加します（ファイル内にこれらの行が存在する場合は編集する）。

```
set noexec_user_stack=1
set semsys:seminfo_semms=100
set semsys:seminfo_semms=1024
set semsys:seminfo_semmsl=256
set semsys:seminfo_semvmx=32767
set shmsys:shminfo_shmmax=4294967295
set shmsys:shminfo_shmmin=1
set shmsys:shminfo_shmmi=100
set shmsys:shminfo_shmsegs=10
```

- c. 次のコマンドを入力して、システムを再起動します。

```
# /usr/sbin/reboot
```

- d. システムを再起動したら、ログインしてユーザーを root に切り替えます。

Solaris 10 では、リソース制御に指定された現在の値を表示し、必要に応じて変更するために次の手順を実行します。

1. リソース制御の現在の値を表示するには、次のコマンドを入力します。

```
# id -p // to verify the project id
uid=0(root) gid=0(root) projid=1 (user.root)
# prctl -n project.max-shm-memory -i project user.root
# prctl -n project.max-sem-ids -i project user.root
```

2. 現在の値を変更する場合は、次の手順を実行します。

- a. max-shm-memory の値を 6GB に変更するには:

```
# prctl -n project.max-shm-memory -v 6gb -r -i project user.root
```

- b. max-sem-ids の値を 256 に変更するには:

```
# prctl -n project.max-sem-ids -v 256 -r -i project user.root
```

## 3.8 ポート

Oracle HTTP Server、OracleAS Web Cache、Oracle Enterprise Manager 10g などの多くの Oracle Business Intelligence コンポーネントには、ポートが使用されます。インストーラでデフォルトのポート番号を自動的に割り当てるか、または各自で指定したポート番号を使用します。

- 第 3.8.1 項「ポートが使用中かどうかの確認」
- 第 3.8.2 項「デフォルトのポート番号の使用」
- 第 3.8.3 項「カスタム・ポート番号の使用（静的ポート機能）」

### Oracle HTTP Server のデフォルト・ポートがポート 7777 でありポート 80 でない理由

デフォルトでは、インストーラによって、Oracle HTTP Server がポート 80 ではなくポート 7777 を使用するように構成されます。ポート 7777 がデフォルト・ポートである理由として、UNIX では、1024 未満のポート番号を使用するコンポーネントを実行する場合に、事前に root ユーザーとして追加の作業が必要になることがあげられます。インストーラは root としてアクセスできないため、1024 より大きなポートを使用する必要があります。

Oracle HTTP Server でポート 80 などの別のポートを使用するには、静的ポート機能を使用してコンポーネントのポート番号を指定します。インストールの後でもポート番号は変更できませんが、インストール時にポート番号を設定する方が簡単です。

## 3.8.1 ポートが使用中かどうかの確認

ポートが使用中かどうかを確認するには、次のように netstat コマンドを実行します。

```
prompt> netstat -an | grep portnum
```

## 3.8.2 デフォルトのポート番号の使用

コンポーネントにデフォルトのポート番号を使用する場合は、何もする必要はありません。デフォルトのポート番号とポート範囲のリストは、付録 C 「デフォルトのポート番号」を参照してください。各コンポーネントのポート範囲で、少なくとも 1 つのポートが使用できることを確認してください。インストーラが範囲内で空いているポートを見つけられないと、インストーラが失敗します。

## 3.8.3 カスタム・ポート番号の使用（静的ポート機能）

コンポーネントにカスタム・ポート番号を割り当てるようにインストーラに指示する手順は次のとおりです。

1. コンポーネント名とポート番号を含んだファイルを作成します。ファイル・フォーマットは、第 3.8.3.1 項「staticports.ini ファイルのフォーマット」を参照してください。このファイルには、一般に staticports.ini という名前が付けられますが、名前は自由に指定できます。
2. インストーラの「ポート構成オプションの指定」画面で、「手動」を選択し、staticports.ini ファイルへの完全なパスを入力します。

ファイルへの完全なパスを指定しないと、インストーラはファイルを検出できません。この場合インストーラは、警告を表示することなくすべてのコンポーネントにデフォルトのポートを割り当てます。

---

**以前のリリースとの違い：** 10g (9.0.4) では、コマンドライン・オプションを使用して staticports.ini ファイルを指定していました。このリリースでは、新しい「ポート構成オプションの指定」画面でファイルを指定します。

---

### 3.8.3.1 staticports.ini ファイルのフォーマット

staticports.ini ファイルのフォーマットは次のとおりです。port\_num は、コンポーネントに使用するポート番号で置き換えてください。

```
# J2EE and Web Cache
Oracle HTTP Server port = port_num
Oracle HTTP Server Listen port = port_num
Oracle HTTP Server SSL port = port_num
Oracle HTTP Server Listen (SSL) port = port_num
Oracle HTTP Server Diagnostic port = port_num
Java Object Cache port = port_num
DCM Java Object Cache port = port_num
DCM Discovery port = port_num
Oracle Notification Server Request port = port_num
```

```

Oracle Notification Server Local port = port_num
Oracle Notification Server Remote port = port_num
Application Server Control port = port_num
Application Server Control RMI port = port_num
Oracle Management Agent port = port_num
Web Cache HTTP Listen port = port_num
Web Cache HTTP Listen (SSL) port = port_num
Web Cache Administration port = port_num
Web Cache Invalidation port = port_num
Web Cache Statistics port = port_num
Log Loader port = port_num
ASG port = port_num

# Business Intelligence and Forms
Reports Services SQL*Net port = port_num
Reports Services discoveryService port = port_num
Reports Services bridge port = port_num

# Infrastructure
Oracle Internet Directory port = port_num
Oracle Internet Directory (SSL) port = port_num
Oracle Certificate Authority SSL Server Authentication port = port_num
Oracle Certificate Authority SSL Mutual Authentication port = port_num
Ultra Search HTTP port number = port_num

```

このファイルを作成する場合は、CD-ROM (Disk 1) または DVD-ROM の staticports.ini ファイルをテンプレートとして使用する方法が最も簡単です。

1. CD-ROM または DVD-ROM の staticports.ini ファイルを、ハード・ディスクにコピーします。

**表 3-7 CD-ROM または DVD-ROM の staticports.ini ファイルの場所**

メディア	staticports.ini ファイルの場所
CD-ROM	mount_point: Disk 1/1012disk1/stage/Response/staticports.ini
DVD-ROM	mount_point/application_server/stage/Response/staticports.ini

2. ローカル・コピー (ハード・ディスク上のファイル) を編集して必要なポート番号を指定します。

staticports.ini ファイル内のすべてのコンポーネントにポート番号を指定する必要はありません。ファイルに列記されていないコンポーネントには、デフォルトのポート番号が使用されます。

次の例では、Application Server Control のポートといくつかの OracleAS Web Cache のポートを設定しています。指定されていないコンポーネントには、デフォルトのポート番号が割り当てられます。

```

Application Server Control port = 2000
Web Cache Administration port = 2001
Web Cache Invalidation port = 2002
Web Cache Statistics port = 2003

```

インストールが完了したら、ORACLE\_HOME/install/portlist.ini ファイルで、割り当てられたポートを確認できます。

---



---

**ポート番号を選択する際の注意：**

- ポート番号は 65535 を超えることはできません。
  - コンポーネントに 1024 より小さいポート番号を使用する場合は、root ユーザーとしてコンポーネントを実行する必要があります。
  - コンポーネントに 1024 より小さいポート番号を使用する場合、インストール終了時にインストーラではそのコンポーネントを起動できません。コンポーネントを起動する前に構成が必要な場合があります。詳細は、該当するコンポーネントのドキュメントを参照してください。
  - Oracle Internet Directory でポート 389 および 636 を使用する場合は、これらのポート番号を /etc/services ファイルでコメント・アウトする必要があります。
  - Oracle HTTP Server と OracleAS Web Cache のポート番号を設定する場合は、[第 3.8.3.3 項「Oracle HTTP Server と OracleAS Web Cache のポート」](#)を必ずお読みください。
- 
- 

インストーラは、メモリーをチェックすることで、ファイルに指定されたポートが使用可能であることを確認します。つまり、実行中のプロセスが使用しているポートのみを検出できます。インストーラが、構成ファイルを参照してアプリケーションが使用しているポートを判定することはありません。

指定したポートが使用不可能であることが検出されると、アラートが表示されます。使用不可能なポートは割り当てられません。これを解決するには、次の操作を実行します。

1. staticports.ini ファイルを編集して別のポートを指定するか、ポートを使用するアプリケーションをシャット・ダウンします。
2. 「再試行」をクリックします。staticports.ini ファイルが再び読み取られ、ファイル内のエントリが再度確認されます。

**portlist.ini を staticports.ini ファイルとして使用**

staticports.ini ファイルは、Oracle Business Intelligence のインストール後に作成される ORACLE\_HOME/install/portlist.ini ファイルと同じフォーマットを使用します。Oracle Business Intelligence をすでにインストールし、別のインストールで同じポート番号を使用する場合は、最初のインストールで作成された portlist.ini ファイルを、後続のインストールの staticports.ini ファイルとして使用します。

portlist.ini ファイルは、ORACLE\_HOME/install/ ディレクトリにあります。

ただし、staticports.ini の Oracle Management Agent port 行が、portlist.ini の Enterprise Manager Agent port 行に対応していることに注意してください。

**3.8.3.2 エラーが原因でデフォルトのポートが指定したポートにかわって使用されるケース**

誤ってインストーラが警告を表示せずにデフォルトのポートを使用する場合がありますので、staticports.ini ファイルを慎重に確認します。確認の必要な点は次のとおりです。

- 複数のコンポーネントに同じポートを指定すると、指定したポートは最初のコンポーネントに使用され、その他のコンポーネントにはコンポーネントのデフォルトのポートが使用されます。複数のコンポーネントに同じポートを指定していても、インストーラからは警告が表示されません。
- staticports.ini ファイルに構文エラーがあると（たとえば、ある行で = 文字を省略した場合など）、インストーラはその行を無視します。このような行に指定されたコンポーネントには、デフォルトのポートが割り当てられます。行に構文エラーがあっても、インストーラからは警告が表示されません。

- コンポーネント名のスペルを間違えた場合、そのコンポーネントにはデフォルトのポートが割り当てられます。ファイル内のコンポーネント名は、大 / 小文字が区別されます。行に認識できない名前を指定していても、インストーラからは警告が表示されません。
- ポート番号に数値以外の値を指定すると、その行は無視され、コンポーネントにデフォルトのポート番号が割り当てられます。この場合、警告は表示されません。
- `staticports.ini` ファイルへの相対パス (`./staticports.ini`、または単に `staticports.ini` など) を指定すると、ファイルが検出されなくなります。インストーラは警告を表示せずに処理を続行し、すべてのコンポーネントにデフォルト・ポートを割り当てます。`staticports.ini` ファイルへの完全なパスを指定する必要があります。

### 3.8.3.3 Oracle HTTP Server と OracleAS Web Cache のポート

これらのコンポーネントにポートを設定する場合は、次の点を理解しておいてください。

Oracle HTTP Server の `httpd.conf` ファイルでは、`Port` および `Listen` ディレクティブで、OracleAS Web Cache と Oracle HTTP Server が使用するポートを指定します。`staticports.ini` ファイルでこれらのポートを設定するための適切な行は、構成中のコンポーネントによって異なります。

#### OracleAS Web Cache および Oracle HTTP Server を構成する場合

1. OracleAS Web Cache のポートを設定します。

OracleAS Web Cache は、`Port` ディレクティブで指定されたポートを使用します (図 3-1)。このポートを設定するには、`staticports.ini` ファイルのこの行を使用します。

```
Web Cache HTTP Listen port = port_number
```

OracleAS Web Cache の SSL ポートを構成するには、次の行を使用します。

```
Web Cache HTTP Listen (SSL) port = port_number
```

この場合、Oracle HTTP Server `port` 行を使用してポート番号を設定することはできません。`staticports.ini` ファイルに Oracle HTTP Server `port` 行と Web Cache HTTP Listen `port` 行の両方が含まれている場合は、Oracle HTTP Server `port` 行が無視されます。たとえば、`staticports.ini` に次の行を指定したとします。

```
Web Cache HTTP Listen port = 7979
Oracle HTTP Server port = 8080
```

`Port` ディレクティブは 7979 に設定されます。

2. Oracle HTTP Server のポートを設定します。

Oracle HTTP Server は、`Listen` ディレクティブで指定されたポートを使用します。このポートを設定するには、`staticports.ini` ファイルのこの行を使用します。

```
Oracle HTTP Server Listen port = port_number
```

SSL リスニング・ポートを構成するには、次の行を使用します。

```
Oracle HTTP Server Listen (SSL) port = port_number
```

図 3-1 OracleAS Web Cache および Oracle HTTP Server の両方を構成する場合



### Oracle HTTP Server のみを構成する場合（OracleAS Web Cache は構成しない）

Oracle HTTP Server のみを構成する場合、Oracle HTTP Server は、Port ディレクティブと Listen ディレクティブの両方を使用します（図 3-2）。この場合は、両方のディレクティブが同じポート番号を使用するように設定する必要があります。

これらのポートを設定するには、staticports.ini ファイルの Oracle HTTP Server port 行と Oracle HTTP Server Listen port 行を使用します。次に例を示します。

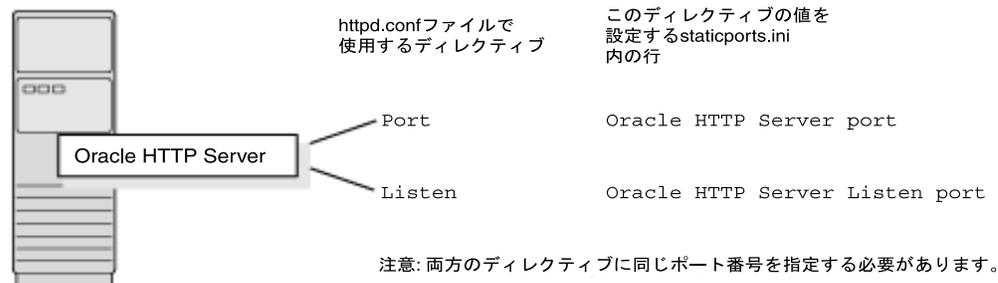
```
Oracle HTTP Server port = 8080
Oracle HTTP Server Listen port = 8080
```

これらのポートの SSL バージョンを設定するには、次の行を使用します。非 SSL バージョンの場合と同様に、ポート番号を同じにする必要があります。

```
Oracle HTTP Server SSL port = 443
Oracle HTTP Server Listen (SSL) port = 443
```

staticports.ini に Web Cache 行を指定しても、OracleAS Web Cache を構成していないのでそれらの行は無視されます。

図 3-2 Oracle HTTP Server のみを構成する場合



### 3.8.3.4 例

この項では、staticports.ini を使用する一般的なシナリオをいくつか取り上げます。

- 第 3.8.3.4.1 項「OracleAS Web Cache をフロントエンドとして使用し、Oracle HTTP Server でポート 80 と 443 を使用するように構成する」
- 第 3.8.3.4.2 項「OracleAS Web Cache なしで、Oracle HTTP Server でポート 80 と 443 を使用するように構成する」

**3.8.3.4.1 OracleAS Web Cache をフロントエンドとして使用し、Oracle HTTP Server でポート 80 と 443 を使用するように構成する** このシナリオでは、次の行を含む `staticports.ini` ファイルを作成します。

```
Web Cache HTTP Listen port = 80
Oracle HTTP Server Listen port = 81
Web Cache HTTP Listen (SSL) port = 443
Oracle HTTP Server Listen (SSL) port = 444
```

Oracle HTTP Server リスニングと SSL リスニングのポートには、使用可能なポートをどれでも指定できます。この例では、ポート 81 と 444 が使用されています。これらのポート番号は、1024 未満でなくてもかまいません。1024 未満のポート番号を選択する場合は、Oracle HTTP Server と OracleAS Web Cache を root ユーザーとして起動してください。

---

**注意：** 1024 未満のポート番号を使用しているため、Oracle HTTP Server と OracleAS Web Cache を root ユーザーとして実行するように構成する必要があります。構成は、インストール中またはインストール後に行うことができます。

インストール後に構成を行う場合は、インストーラによってコンポーネントが起動されません（まだ構成されていないため）。

詳細は、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』および『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』を参照してください。

---

**3.8.3.4.2 OracleAS Web Cache なしで、Oracle HTTP Server でポート 80 と 443 を使用するように構成する** このシナリオでは、次の行を含む `staticports.ini` ファイルを作成します。

```
Oracle HTTP Server port = 80
Oracle HTTP Server Listen port = 80
Oracle HTTP Server SSL port = 443
Oracle HTTP Server Listen (SSL) port = 443
```

---

**注意：** 1024 未満のポート番号を使用しているため、Oracle HTTP Server を root ユーザーとして実行するように構成する必要があります。詳細は、第 3.8.3.4.1 項の「注意」を参照してください。

---

## 3.9 オペレーティング・システム・グループ

次の場合、オペレーティング・システム・グループを作成する必要があります。

- Oracle 製品がインストールされていないコンピュータに Oracle Application Server 10g Forms and Reports Services をインストールする場合は、インベントリ・ディレクトリを所有するためのグループを作成します。第 3.9.1 項「[インベントリ・ディレクトリ用のグループの作成](#)」を参照してください。
- OracleAS Metadata Repository を新規データベース（インストーラによって作成されたデータベース）にインストールする場合は、データベース管理者のグループを作成します。第 3.9.2 項「[データベース管理者のグループの作成](#)」を参照してください。

オペレーティング・システム・ユーザーおよびグループの詳細は、使用するオペレーティング・システムのドキュメントを参照するか、システム管理者に問い合せてください。

### 3.9.1 インベントリ・ディレクトリ用のグループの作成

Oracle 製品がインストールされていないコンピュータに Oracle Application Server 10g Forms and Reports Services をインストールする場合は、インベントリ・ディレクトリを所有するためのグループを作成します。インストーラは、そのファイルをインベントリ・ディレクトリに書き込むことで、コンピュータにインストールされている Oracle 製品の状況を把握します。

このマニュアルでは、このオペレーティング・システム・グループに `oinstall` という名前を使用します。

インベントリ・ディレクトリ用のグループを別途用意することで、複数のユーザーがコンピュータに Oracle 製品をインストールできるようになります。ユーザーには、インベントリ・ディレクトリに対する書き込み権限が必要です。この権限は、`oinstall` グループに属することで取得できます。

コンピュータに Oracle 製品を初めてインストールすると、インベントリ・ディレクトリ用のグループ名を入力する画面と、インベントリ・ディレクトリの場所を入力する画面が表示されます。

インベントリ・ディレクトリのデフォルトの名前は `oraInventory` です。

コンピュータにインベントリ・ディレクトリがすでに存在しているかどうかかわからない場合は、`/etc/oraInst.loc` ファイルを調べます。このファイルは、インベントリ・ディレクトリの場所とそれを所有するグループを示します。このファイルが存在しない場合は、コンピュータに Oracle 製品がインストールされていません。

### 3.9.2 データベース管理者のグループの作成

この項は、インストーラによって作成された新しいデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールする場合にのみ適用されます。

データベースがマウントされておらず、データベース認証が使用できない場合、データベースではオペレーティング・システム・グループを使用してユーザーの権限が判定されます。データベースでは、次のグループと権限が認識されます。

**表 3-8 OSDBA グループと OSOPER グループの権限**

グループ	説明
OSDBA	データベース管理者のグループです。このグループのユーザーには、SYSDBA 権限が付与されます。
OSOPER	このグループのユーザーには、基本的なメンテナンスに必要な権限から構成される SYSOPER 権限が付与されます。これには、データベースの起動とシャットダウン、およびデータベース操作に必要なその他の権限が含まれます。SYSOPER 権限は、SYSDBA 権限のサブセットです。

これらのグループには、オペレーティング・システム・グループを作成する必要があります。

`dba` というオペレーティング・システム・グループに `SYSDBA` 権限を付与する場合は、次の手順を実行します。

1. `dba` グループを作成します。
2. インストーラを実行しているユーザーが `dba` グループのメンバーであることを確認します。

別のオペレーティング・システム・グループが `SYSDBA` 権限を持つようにする、または `SYSDBA` 権限と `SYSOPER` 権限を別のグループに関連付けるには、インストーラを実行するユーザーが `dba` グループに所属しないようにします。

インストーラを実行するユーザーが `dba` グループに所属していない場合、インストーラにより、データベース管理者権限を持つグループの名前を入力する画面が表示されます。画面には 2 つのフィールドがあります。1 つは `OSDBA` グループ用で、もう 1 つは `OSOPER` グループ用です (表 3-8 を参照)。両方のフィールドに同じオペレーティング・システム・グループを入力できます。

## 3.10 オペレーティング・システム・ユーザー

オペレーティング・システム・ユーザーは、Oracle 製品をインストールおよびアップグレードするために作成します。このマニュアルでは、このユーザーを `oracle` ユーザーと呼びます。インストーラを実行する `oracle` ユーザーは、次のディレクトリに対する書込み権限を所有している必要があります。

- インストールする製品のファイルを配置する Oracle ホーム・ディレクトリ
- インストーラがすべての Oracle 製品に使用するインベントリ・ディレクトリ

コンピュータに他の Oracle 製品がインストールされている場合は、この目的に使用するユーザーがすでに作成されている可能性があります。/etc/oraInst.loc または /var/opt/oracle/oraInst.loc を参照します。このファイルは、インベントリ・ディレクトリの場所とそれを所有するグループを示します。このファイルが存在しない場合は、コンピュータに Oracle 製品がインストールされていません。

Oracle 製品をインストールするためのユーザーが存在しない場合は、次のプロパティを持つユーザーを作成します。

**表 3-9 インストーラを実行するオペレーティング・システム・ユーザーのプロパティ**

項目	説明
ログイン名	ユーザーには任意の名前を使用できます。このマニュアルでは、このユーザーを <code>oracle</code> ユーザーと呼びます。
グループ識別子	<code>oracle</code> ユーザーのプライマリ・グループには、 <code>oraInventory</code> ディレクトリに対する書込み権限が必要です。このグループの詳細は、 <a href="#">第 3.9.1 項「インベントリ・ディレクトリ用のグループの作成」</a> を参照してください。 グループには任意の名前を使用できます。このマニュアルでは、 <code>oinstall</code> という名前を使用します。
ホーム・ディレクトリ	<code>oracle</code> ユーザーのホーム・ディレクトリは、他のユーザーのホーム・ディレクトリと一致させることができます。
ログイン・シェル	デフォルトのログイン・シェルは、 <code>C</code> 、 <code>Bourne</code> または <code>Korn</code> シェルです。

ローカルのオペレーティング・システム・ユーザーを作成する手順は、次のとおりです。

1. `oracle` ユーザーを作成するには、次のようなコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/useradd -g oinstall -G dba[,oper] oracle
```

このコマンドでは、次のオプションが使用されています。

- `-g` オプションは、プライマリ・グループを指定します。プライマリ・グループは、`oinstall` などの Oracle インベントリ・グループである必要があります。
- `-G` オプションは、セカンダリ・グループを指定します。セカンダリ・グループには、`dba` または `dba,oper` など、OSDBA グループおよび必要に応じて OSOPER グループを含める必要があります。

2. `oracle` ユーザーのパスワードを設定します。

```
# passwd oracle
```

オペレーティング・システム・ユーザーが属しているグループをチェックするには、ユーザーの名前を指定して `groups` コマンドを実行します。次に例を示します。

```
prompt> groups oracle
```

オペレーティング・システム・ユーザーおよびグループの詳細は、使用するオペレーティング・システムのドキュメントを参照するか、システム管理者に問い合せてください。

## 3.11 環境変数

Oracle Business Intelligence をインストールするオペレーティング・システム・ユーザーは、表 3-10 に示された環境変数を設定（または設定解除）する必要があります。

表 3-10 環境変数のまとめ

環境変数	設定または設定解除
第 3.11.2 項「ORACLE_HOME および ORACLE_SID」	影響なし（インストーラがこの 2 つの環境変数を設定解除する）。
第 3.11.3 項「PATH、CLASSPATH および LD_LIBRARY_PATH」	Oracle ホーム・ディレクトリ内のディレクトリへの参照を含めてはならない。
第 3.11.4 項「DISPLAY」	インストーラのウィンドウを表示するモニターに設定する。
第 3.11.5 項「TMP と TMPDIR」	オプション。設定解除すると、デフォルトで /tmp に設定される。
第 3.11.6 項「TNS_ADMIN」	設定しない。
第 3.11.7 項「REPORTS_DEFAULT_DISPLAY」	デフォルトでは YES に設定。NO に設定する場合は、必ず適切な表示を指定する。

### 3.11.1 環境変数に関するヒント

環境変数を操作する場合のヒントをいくつか示します。

- .profile ファイルに環境変数を設定した場合に、それらが読み取られないことがあります。環境変数が正しい値に設定されていることを確認するには、インストーラを実行するシェルでそれらの値をチェックします。
- 環境変数の値をチェックするには、env コマンドを使用します。このコマンドによって、現在定義されているすべての環境変数とその値が表示されます。

```
% env
```

- 新規ユーザーとして su コマンドを使用してユーザーを切り替える（たとえば root ユーザーから oracle ユーザーへ）場合は、環境変数をチェックしてください。これは、環境変数が新規ユーザーに渡されない場合があるからです。この状況は、- パラメータを指定して su を実行した場合（su - user）でも発生する可能性があります。

```
# /* root user */
# su - oracle
% env
```

### 3.11.2 ORACLE\_HOME および ORACLE\_SID

これらの環境変数はインストーラによって設定解除されるため、インストーラ起動時にこれらの環境変数が設定されているかどうかは問題ではありません。

### 3.11.3 PATH、CLASSPATH および LD\_LIBRARY\_PATH

PATH、CLASSPATH、LD\_LIBRARY\_PATH の各環境変数を編集して、それらが Oracle ホーム・ディレクトリを参照しないようにします。

共有ライブラリ・パスの環境変数は、LD\_LIBRARY\_PATH です。

### 3.11.4 DISPLAY

インストーラを表示する X サーバーを指すように、DISPLAY 環境変数を設定します。DISPLAY 環境変数のフォーマットは次のとおりです。

```
hostname:display_number.screen_number
```

例 (C シェル) :

```
% setenv DISPLAY test.mydomain.com:0.0
```

例 (Bourne または Korn シェル) :

```
$ DISPLAY=test.mydomain.com:0.0; export DISPLAY
```

Oracle Business Intelligence では、インストール中のみ X サーバーが実行されている必要があります。オペレーティング・システムとともにインストールされたフレーム・バッファ X サーバーでは、インストール中にユーザーがログインしたままフレーム・バッファを実行している必要があります。これを望まない場合は、X Virtual Frame Buffer (XVFB) や Virtual Network Computing (VNC) などの仮想フレーム・バッファを使用します。

XVFB やその他の仮想フレーム・バッファ・ソリューションの取得とインストールについては、Oracle Technology Network (<http://www.oracle.com/technology/products/>) にアクセスしてください。OTN で「frame buffer」を検索します。

### 3.11.5 TMP と TMPDIR

インストール中、インストーラは一時ディレクトリに一時ファイルを書込む必要があります。デフォルトの一時ディレクトリは、/tmp です。

インストーラで /tmp 以外のディレクトリが使用されるようにするには、TMP 環境変数を代替ディレクトリのフルパスに設定します。

例 (C シェル) :

```
% setenv TMP /tmp2
% setenv TMPDIR /tmp2
```

例 (Bourne または Korn シェル) :

```
$ TMP=/tmp2; export TMP
$ TMPDIR=/tmp2; export TMPDIR
```

この環境変数を設定せず、デフォルトのディレクトリに十分な領域がない場合、環境変数が設定されていないというエラー・メッセージがインストーラによって表示されます。異なるディレクトリを指すように環境変数を設定するか、またはデフォルトのディレクトリに十分な領域を解放してください。どちらの場合も、インストールをやり直す必要があります。

### 3.11.6 TNS\_ADMIN

この項では、2つの要件について説明します。

- TNS\_ADMIN 環境変数を設定しないこと。
- /etc または /var/opt/oracle ディレクトリに tnsnames.ora ファイルが含まれていないこと。

これらの要件は、様々な Oracle 製品の Net 構成ファイル間で競合が発生しないようにするために必要です。

TNS\_ADMIN を設定するか、または tnsnames.ora ファイルを /etc か /var/opt/oracle に配置する必要がある場合は、Oracle Business Intelligence をインストールする前に次の手順を実行します。

1. tnsnames.ora ファイルを /etc か /var/opt/oracle に配置した場合は、このファイルを別のディレクトリに移動します。あるいは、ファイルの名前を変更してもかまいません。

2. TNS\_ADMIN 環境変数が設定されていないことを確認します。

例 (C シェル) :

```
% unsetenv TNS_ADMIN
```

例 (Bourne または Korn シェル) :

```
$ unset TNS_ADMIN
```

インストール後に、新たに作成された tnsnames.ora ファイルを、既存の tnsnames.ora ファイルとマージすることができます。

### 3.11.7 REPORTS\_DEFAULT\_DISPLAY

REPORTS\_DEFAULT\_DISPLAY 環境変数は、Oracle Reports に対して次の実装を行うかどうかを指定します。

- DISPLAY に依存しない
- フォント情報に定義された有効なプリンタを保有することに依存しない
- イメージの表面解像度およびフォント情報に対応する ScreenPrinter (screenprinter.ppd) の実装
- Advanced Imaging Support の実装

Oracle Reports に対して REPORTS\_DEFAULT\_DISPLAY=YES を設定すると、DISPLAY 環境変数に設定された値が上書きされます。REPORTS\_DEFAULT\_DISPLAY の詳細は、『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』を参照してください。

---

**注意：** REPORTS\_DEFAULT\_DISPLAY は、Oracle Reports にのみ使用され、Oracle Application Server のインストーラには適用できません。このインストーラは、REPORTS\_DEFAULT\_DISPLAY が YES に設定されていても、引き続き DISPLAY 環境変数を使用します。

---

## 3.12 /etc/hosts ファイル

/etc/hosts ファイルの内容は、デフォルトの Oracle Identity Management レルムの場所および Oracle Application Server Single Sign-On のホスト名に影響します。

これとは別に、hosts ファイルを編集することなく必要な値を入力する方法もあります。詳細は、Oracle Application Server のインストレーション・ガイドを参照してください。

## 3.13 ネットワーク関連トピック

一般に、Oracle Business Intelligence をインストールするコンピュータはネットワークに接続されており、Oracle Business Intelligence のインストールを格納するローカル・ストレージ、ディスプレイ・モニター、および CD-ROM または DVD-ROM ドライブを備えています。

この項では、一般的なシナリオとは一致しないコンピュータに Oracle Business Intelligence をインストールする手順について説明します。取り上げるケースは次のとおりです。

- 第 3.13.1 項「マルチホーム (マルチ IP) コンピュータへのインストール」
- 第 3.13.2 項「ハード・ドライブへの CD-ROM または DVD-ROM のコピー、およびハード・ドライブからのインストール」
- 第 3.13.3 項「リモートの CD-ROM/DVD ドライブからのインストール」
- 第 3.13.4 項「リモート・コンピュータへのインストール」
- 第 3.13.5 項「NFS がマウントされたストレージへのインストール」
- 第 3.13.6 項「1 つのインストールからの複数のインスタンスの実行」

- 第 3.13.7 項「NIS および NIS+ のサポート」
- 第 3.13.8 項「Java 用のフォント・パッケージ」
- 第 3.13.9 項「複数のネットワーク・カードを持つコンピュータへのインストール」

### 3.13.1 マルチホーム（マルチ IP）コンピュータへのインストール

マルチホーム・コンピュータには、複数の IP アドレスが関連付けられています。これは、コンピュータに複数のネットワーク・カードを搭載することで実現されます。各 IP アドレスにはホスト名が関連付けられています。また、ホスト名に別名を設定することもできます。Oracle Universal Installer では、ホスト名を検出するために、デフォルトで ORACLE\_HOSTNAME 環境変数の設定が使用されます。ORACLE\_HOSTNAME が設定されておらず、複数のネットワーク・カードを持つコンピュータに Oracle Business Intelligence をインストールする場合、ホスト名は /etc/hosts ファイルの最初の名前を使用して特定されます。

クライアントは、このホスト名（またはこのホスト名の別名）を使用してコンピュータにアクセスすることが必要です。チェックするには、クライアント・コンピュータから短縮名（ホスト名のみ）および完全名（ホスト名とドメイン名）を使用してホスト名に ping します。どちらも成功する必要があります。

### 3.13.2 ハード・ドライブへの CD-ROM または DVD-ROM のコピー、およびハード・ドライブからのインストール

Oracle Business Intelligence の CD-ROM または DVD-ROM からインストールするかわりに、CD-ROM または DVD-ROM の内容をハード・ドライブにコピーし、ハード・ドライブからインストールすることができます。ネットワークで Oracle Business Intelligence のインスタンスを多数インストールする場合や、Oracle Business Intelligence をインストールするコンピュータに CD-ROM または DVD-ROM ドライブがない場合は、ハード・ドライブからインストールの方が簡単です。

リモートの CD-ROM または DVD-ROM ドライブからインストールすることもできます。第 3.13.3 項「リモートの CD-ROM/DVD ドライブからのインストール」を参照してください。

ハード・ドライブからインストールするときは、CD-ROM の交換を要求されません。ファイルが適切な場所にあれば、それらがすべて検出されます。

#### CD-ROM をコピーするには：

1. 親ディレクトリ (orasolfrs、orafrs など) を作成し、親ディレクトリの下に Disk1 や Disk2 などのサブディレクトリを作成します。サブディレクトリの名前は、DiskN にする必要があります (N は CD-ROM の番号)。
2. 各 CD-ROM の内容を、対応するディレクトリにコピーします。

```
prompt> cp -pr /cdrom_mount_point/10.1.2disk1/* /path/to/hard/drive/Disk1/
prompt> cp -pr /cdrom_mount_point/10.1.2disk2/* /path/to/hard/drive/Disk2/
... Repeat for each CD-ROM.
```

コピーされたファイルからインストーラを実行するには、Disk1 ディレクトリから runInstaller 実行可能ファイルを起動します。これは、Oracle Business Intelligence を実行することになるコンピュータから実行します。

```
prompt> /path/to/hard/drive/Disk1/runInstaller
```

#### orasolfrs ディレクトリを DVD-ROM からコピーするには

DVD-ROM の orasolfrs ディレクトリを、ハード・ディスクにコピーします。

```
prompt> cp -pr /dvd_mount_point/orasolfrs /path/to/hard/drive
```

コピーされたファイルからインストーラを実行するには、Oracle Business Intelligence を実行する予定のコンピュータから `runInstallersetup.exe` 実行可能ファイルを起動します。

```
prompt> /path/to/hard/drive/orasolfrs/runInstaller
```

### 3.13.3 リモートの CD-ROM/DVD ドライブからのインストール

Oracle Business Intelligence をインストールするコンピュータに CD-ROM または DVD ドライブがない場合は、リモートの CD-ROM または DVD ドライブからインストールを実行できます。次の作業が完了していることを確認します。

- リモートの CD-ROM または DVD-ROM ドライブを、NFS 経由で共有する必要があります。

CD-ROM または DVD-ROM ドライブを備えたリモート・コンピュータで、次の作業を行います。

1. CD-ROM: Oracle Business Intelligence の Disk 1 を、CD-ROM ドライブに挿入します。

DVD-ROM: Oracle Business Intelligence の DVD-ROM を、DVD-ROM ドライブに挿入します。

2. CD-ROM または DVD-ROM ドライブを共有します。

CD-ROM:

```
prompt> su
Password: root_password
# share -F nfs -o ro /cdrom/disk1
```

パス `/cdrom/disk1` は、CD-ROM ドライブ内の CD-ROM のパスを指定しています。任意のパスを使用できます。

DVD-ROM:

```
prompt> su
Password: root_password
# share -F nfs -o ro /cdrom
```

パス `/cdrom` は、DVD-ROM ドライブ内の DVD-ROM のパスを指定しています。任意のパスを使用できます。

ローカル・コンピュータで、CD-ROM または DVD-ROM にアクセスし、次のようにインストーラを実行します。

CD-ROM:

```
prompt> /net/remote_computer_hostname/cdrom/disk1/runInstaller
```

DVD-ROM:

```
prompt> /net/remote_computer_hostname/cdrom/orasolfrs/runInstaller
```

`remote_computer_hostname` は、リモート・コンピュータの名前で置き換えてください。

- 次の CD-ROM の交換に関する記述は、DVD には該当しません。

インストーラから CD-ROM の交換を要求されたら、CD-ROM ドライブの共有を解除し、CD-ROM を取り出して要求された CD-ROM を挿入し、再び CD-ROM ドライブを共有する必要があります。共有を解除しないと、CD-ROM は取り出せません。

---

**注意：** CD-ROM を交換するときは、インストーラが実行している必要があります。CD-ROM を交換するときはインストーラを終了しないでください。インストーラを終了した場合、中止した時点から作業を継続することはできません。また、部分的に作成されたインストールは使用できず、場合によっては手動で削除する必要があります。

---

CD-ROM ドライブを備えたりリモート・コンピュータで、次のコマンドを実行します。

```
prompt> su
Password: root_password
# unshare /cdrom/disk1
# eject cdrom
... Remove the CD-ROM, and insert the CD-ROM requested by the installer (for
... example, Disk 2).
... Share the CD-ROM.
# share -F nfs -o ro /cdrom/disk2
```

### 3.13.4 リモート・コンピュータへのインストール

インストーラをリモート・コンピュータ (*remote\_computer*) で実行し、その画面をローカル・コンピュータ (*local\_computer*) に表示することができます。Forms and Reports Services はリモート・コンピュータにインストールされます。

1. *remote\_computer* を *local\_computer* に表示できるようにします。ローカル・コンピュータのコンソールで、次のコマンドを実行します。

```
local_computer> xhost +remote_computer
```

*xhost* を実行しないと、インストーラ起動時に「Failed to connect to server」、「Connection refused by server」、「Can't open display」などの Xlib エラーが表示される場合があります。

2. *local\_computer* で、*remote\_computer* へのリモート・ログインを実行します (telnet または *rlogin* を使用)。第 3.10 項「オペレーティング・システム・ユーザー」で説明されているように、*oracle* ユーザーでログオンします。第 3.11 項「環境変数」で説明されているように、ユーザーが環境変数を正しく設定していることを確認します。

```
local_computer> rlogin -l oracle remote_computer.mydomain.com
```

- OR -

```
local_computer> telnet remote_computer.mydomain.com
```

3. *remote\_computer* の DISPLAY 環境変数が *local\_computer* を指すように設定します。

例 (C シェル) :

```
remote_computer> setenv DISPLAY local_computer.mydomain.com:0.0
```

例 (Bourne または Korn シェル) :

```
remote_computer> DISPLAY=local_computer.mydomain.com:0.0; export DISPLAY
```

4. インストーラを実行します。インストーラの実行方法の詳細は、第 4.1 項「インストーラの起動」を参照してください。

---

**注意：** PC X エミュレータが PseudoColor カラー・モデルまたは PseudoColor ビジュアルをサポートしている場合は、このエミュレータを使用してインストーラを実行できます。PseudoColor ビジュアルを使用するように PC X エミュレータを設定し、インストーラを起動します。カラー・モデルやビジュアルの設定を変更する方法については、X エミュレータのドキュメントを参照してください。

---

Forms and Reports Services をインストールして実行するリモート・コンピュータ (つまり、Forms and Reports Services コンポーネントを実行する予定の、ハード・ドライブを備えたりリモート・コンピュータ) に物理的にアクセスできない場合でも、VNC や Symantec pcAnywhere などのリモート・コントロール・ソフトウェアがあれば、そのコンピュータでインストールを実行できます。リモート・コントロール・ソフトウェアは、ローカル・コンピュータでも実行する必要があります。

リモート・コンピュータに Forms and Reports Services をインストールするには、次の2つの方法があります。

- Forms and Reports Services の CD-ROM または DVD の内容をハード・ドライブにコピーしておくと、ハード・ドライブからインストールできます。
- ローカル・コンピュータの CD-ROM または DVD ドライブに CD-ROM または DVD を挿入すると、CD-ROM または DVD からインストールできます。

#### ハード・ドライブからのインストール

Forms and Reports Services の CD-ROM または DVD の内容をハード・ドライブにコピーしておくと、ハード・ドライブからインストールできます。ハード・ドライブからインストールする手順は次のとおりです。

1. リモート・コントロール・ソフトウェアがインストールされていて、リモートおよびローカル・コンピュータで実行されていることを確認します。
2. Forms and Reports Services の CD-ROM または DVD をコピーしたハード・ドライブを共有します。
3. リモート・コンピュータで、共有ハード・ドライブにドライブ文字をマッピングします。リモート・コントロール・ソフトウェアを使用して、リモート・コンピュータでこれを実行します。
4. リモート・コントロール・ソフトウェアを使用して、リモート・コンピュータでインストーラを実行します。共有ハード・ドライブからインストーラにアクセスできます。

#### リモートの CD-ROM/DVD ドライブからのインストール

ローカル・コンピュータの CD-ROM または DVD ドライブに CD-ROM または DVD を挿入すると、CD-ROM または DVD からインストールできます。これは、[第 3.13.3 項「リモートの CD-ROM/DVD ドライブからのインストール」](#)で説明したシナリオに似ています。リモートの CD-ROM または DVD からインストールする手順は次のとおりです。

1. リモート・コントロール・ソフトウェアがインストールされていて、リモートおよびローカル・コンピュータで実行されていることを確認します。
2. ローカル・コンピュータで、CD-ROM または DVD ドライブを共有します。  
  
リモート・コンピュータで、共有 CD-ROM または DVD ドライブにドライブ文字をマッピングします。リモート・コントロール・ソフトウェアを使用して、リモート・コンピュータでこれを実行します。  
  
前述の手順については、[第 3.13.3 項「リモートの CD-ROM/DVD ドライブからのインストール」](#)を参照してください。
3. リモート・コントロール・ソフトウェアを使用して、リモート・コンピュータでインストーラを実行します。CD-ROM または DVD 共有ドライブからインストーラにアクセスできます。

### 3.13.5 NFS がマウントされたストレージへのインストール

標準の NFS を使用する Sun コンピュータでは、Oracle Business Intelligence をインストールして実行することができません。Network Appliance (NetApp) Filers などの、NFS がマウントされた認定ストレージ・システムを使用する必要があります。Oracle Business Intelligence は、NFS がマウントされたストレージ・システムでの実行を承認されています。

NetApp システムは、少なくともリモート・インストール・ユーザーとリモート root ユーザーにエクスポートする必要があります。これは、`exportfs` コマンドで実行できます。

```
prompt> exportfs -i /vol/vol1
```

あらゆる更新について最新の動作保証リストを確認するには、Oracle Technology Network (<http://www.oracle.com/technology>) にアクセスしてください。

### 3.13.6 1つのインストールからの複数のインスタンスの実行

Oracle Business Intelligence のコンポーネントは、インストール先のコンピュータだけで実行されるようになっています。リモート・コンピュータから NFS 経由でファイルにアクセスできる場合でも、それらのコンピュータでコンポーネントを実行することはできません。

### 3.13.7 NIS および NIS+ のサポート

NIS および NIS+ 環境で、Oracle Business Intelligence をインストールして実行することができません。これらの環境の詳細は、Oracle Application Server のインストール・ガイドを参照してください。

### 3.13.8 Java 用のフォント・パッケージ

ロケールに応じて、異なる文字設定が必要になる場合があります。Solaris の Java 用フォント・パッケージでは、すべてのロケールに対して、フォント・パッケージとして SUNWllof と SUNWxwfont の両方が常に必要です。ロケールによっては、追加のフォント・パッケージが必要になる場合があります。Solaris のフォント・パッケージのリストについては、次のサイトを参照してください。

<http://java.sun.com/j2se/1.4.1/font-requirements.html>

### 3.13.9 複数のネットワーク・カードを持つコンピュータへのインストール

複数のネットワーク・カードを持つコンピュータに Oracle Business Intelligence をインストールする場合は、`/etc/hosts` ファイル内の最初の名前が使用されます。場合によっては、このファイルの行の順序を変更して、必要なホスト名が最初に来るようにする必要があります。インストール後に、ファイルを元の状態に戻すこともできます。

## 3.14 インストーラによる前提条件チェック

表 3-11 には、インストーラによって実行されるチェックが示されています。

表 3-11 インストーラによる前提条件チェック

項目	説明
CPU	CPU が最小スピードの要件を満たしていることをチェックします。
オペレーティング・システムのパッチ	必要なパッチのリストについては、第 3.5 項「オペレーティング・システムのパッチ (Solaris)」を参照してください。
オペレーティング・システムのパッケージ	必要なパッケージのリストについては、第 3.4 項「ソフトウェア要件の確認」を参照してください。
オペレーティング・システムのカーネル・パラメータ	このチェックの実行対象は Solaris 9 のみです。ただし、インストールする前に、Solaris 10 に対してカーネル・パラメータを手動で確認することをお勧めします。必要なカーネル・パラメータのリストについては、第 3.7 項「カーネル・パラメータ」を参照してください。
メモリー	推奨値は、表 3-1 を参照してください。
スワップ領域	推奨値は、表 3-1 を参照してください。
TMP 領域	推奨値は、表 3-1 を参照してください。
インスタンス名	Forms and Reports Services をインストールするコンピュータに、同じ名前のインスタンスが存在していないかがチェックされます。
Oracle ホーム・ディレクトリの名前	Oracle ホーム・ディレクトリの名前に空白が含まれていないかがチェックされます。

表 3-11 インストーラによる前提条件チェック（続き）

項目	説明
Oracle ホーム・ディレクトリのパス	Oracle ホーム・ディレクトリのパスが 127 文字未満かどうかチェックされます。
Oracle ホーム・ディレクトリの内容	Oracle ホーム・ディレクトリにインストールを妨げる可能性があるファイルが含まれていないかどうかチェックされます。
Oracle ホーム・ディレクトリ	<p>Oracle Developer Suite が存在する Oracle ホームで中間層を拡張またはインストールする場合を除き、Forms and Reports Services は新しいディレクトリにインストールする必要があります。許可されないインストールの例は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Oracle Application Server 10g（全種類）を 8.0、8i、9.0.1 または 9.2 のデータベースの Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ Oracle Application Server 10g（全種類）を Oracle Management Service の Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ Oracle Application Server 10g（全種類）を Oracle Collaboration Suite の Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ Oracle Application Server 10g（全種類）を Oracle HTTP Server のスタンドアロンの Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ Oracle Application Server 10g（全種類）を OracleAS Web Cache のスタンドアロンの Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ Oracle Application Server 10g（全種類）を Oracle9i Developer Suite 9.0.2 の Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ Oracle Application Server 10g（全種類）を Oracle Application Server Containers for J2EE のスタンドアロンの Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ Oracle Application Server 10g（全種類）を Oracle9iAS 1.0.2.2 の Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ Oracle Application Server 10g Forms and Reports Services 中間層を Oracle9iAS 9.0.2 または 9.0.3 中間層の Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ OracleAS Developer Kits 10g を OracleAS Infrastructure 9.0.2 またはリリース 10g の Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ OracleAS Developer Kits 10g を Oracle9iAS 中間層 9.0.2 または 9.0.3 の Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ OracleAS Developer Kits 10g を Oracle Developer Suite 9.0.2 またはリリース 10g の Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ OracleAS Infrastructure 10g を Oracle9iAS 9.0.2 の Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ OracleAS Infrastructure 10g を Oracle Application Server 10g Forms and Reports Services 中間層または OracleAS Developer Kits 10g の Oracle ホームにインストールする</li> <li>■ OracleAS Infrastructure 10g を Oracle Developer Suite 9.0.2 またはリリース 10g の Oracle ホームにインストールする</li> </ul>

表 3-11 インストーラによる前提条件チェック（続き）

項目	説明
ポート 1521	<p>あらゆるバージョンのデータベース・リスナーを含めたアプリケーションによってポート 1521 が使用されている場合は、インストーラから警告が表示されます。ポート 1521 を使用するアプリケーションを停止し、警告ダイアログ・ボックスで「再試行」をクリックする必要があります。</p> <p>データベース・リスナーがポート 1521 を使用している場合は、それをメタデータ・リポジトリ・データベースに使用できる場合があります。</p> <p>別のアプリケーションがポート 1521 を使用している場合は、そのアプリケーションを停止するか、別のポートを使用するように再構成します。あるいは、1521 以外のポートを使用するようにデータベース・リスナーを変更できますが、これはインストール後でないと実行できません。詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。</p>
静的ポートの競合	<p>指定されている場合は、staticports.ini ファイルに記載されているポートを、インストーラがチェックします。第 3.8 項「ポート」を参照してください。</p>
モニター	<p>モニターが少なくとも 256 色を表示するかどうかチェックされます。</p>
表示の許可	<p>DISPLAY 環境変数で指定されたモニターに表示する権限をユーザーが持っているかどうかチェックされます。</p>
DISPLAY 環境変数	<p>DISPLAY 環境変数が設定されているかどうかチェックされます。</p>
TNS_ADMIN 環境変数	<p>TNS_ADMIN 環境変数を設定しないでください。</p> <p>/etc または /var/opt ディレクトリに、tnsnames.ora ファイルが存在しないようにします。</p>
DBC_A_RAW_CONFIG 環境変数	<p>Real Application Clusters または OracleAS Active Failover Cluster 環境に OracleAS Infrastructure 10g をインストールする場合は、RAW パーティションの場所を指定するファイルを示すように、この環境変数を設定する必要があります。</p>
クラスター・ファイル・システム	<p>クラスター・ファイル・システム (CFS) に Oracle Application Server 10g Forms and Reports Services がインストールされないかどうかチェックされます。</p>
Oracle Enterprise Manager ディレクトリの書込み確認	<p>このチェックは、中間層を拡張する場合、または Forms and Reports Services を同じ Oracle ホームに再インストールする場合にのみ実行されます。ユーザーがインストーラを実行するオペレーティング・システムで、これらのディレクトリが書込み可能かどうかチェックされます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ ORACLE_HOME/sysman/emd</li> <li>■ ORACLE_HOME/sysman/config</li> <li>■ ORACLE_HOME/sysman/webapps/emd/WEB-INF/config</li> </ul>
Oracle Enterprise Manager ファイルの存在	<p>このチェックは、中間層を拡張する場合、または Forms and Reports Services を同じ Oracle ホームに再インストールする場合にのみ実行されます。これらのファイルが存在するかどうかチェックされます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ ORACLE_HOME/sysman/config/iasadmin.properties</li> <li>■ ORACLE_HOME/sysman/webapps/emd/WEB-INF/config/console Config.xml</li> </ul>

---

---

# Oracle Business Intelligence のインストール

この章では、Oracle Business Intelligence のコンポーネントのインストール手順について説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- 第 4.1 項 「インストーラの起動」
- 第 4.2 項 「Oracle Business Intelligence のインストール」
- 第 4.3 項 「インストール後の作業」
- 第 4.4 項 「コンポーネントの起動」
- 第 4.5 項 「サンプルの使用」
- 第 4.6 項 「ユーザー・ドキュメントとヘルプのインストールおよびアクセス」
- 第 4.7 項 「次の作業」

## 4.1 インストーラの起動

この項で説明する手順に従って、Solaris でインストーラを起動します。

インストーラの起動方法は、次の手順で説明するように、Oracle Business Intelligence の入手方法によって異なります。

1. Oracle Business Intelligence の CD-ROM または DVD がある場合
  - a. CD-ROM または DVD を、使用しているコンピュータの CD-ROM または DVD ドライブに挿入します。
  - b. 新規のコンソール・ウィンドウを開きます。
  - c. CD-ROM または DVD ドライブの /install ディレクトリに移動します。
  - d. 次のように入力します。

```
runInstaller
```
2. OTN から Oracle Business Intelligence をファイルとしてダウンロードした場合
  - a. 新規のコンソール・ウィンドウを開きます。
  - b. ファイルをローカル・ディレクトリに抽出します。
  - c. /Disk1/install ディレクトリに移動します。
  - d. 次のように入力します。

```
runInstaller
```

## 4.2 Oracle Business Intelligence のインストール

インストーラの各画面に移動するには、いくつかのボタンを使用します。「ヘルプ」をクリックすると、各画面の詳細情報が表示されます。「インストールされた製品」をクリックすると、使用しているコンピュータにすでにインストールされている Oracle ソフトウェアを確認できます。インストーラの前の画面または次の画面に移動するには、「戻る」または「次へ」をクリックします。「インストール」ボタンが使用可能な場合は、このボタンをクリックすると、ファイルのインストールが開始されます。「取消」をクリックすると、処理が停止してインストーラは終了します。さらに、「製品の削除」（「ようこそ」画面でのみ使用可能）をクリックすると、既存の Oracle ソフトウェアを削除できます。

Oracle Universal Installer を使用して Oracle Business Intelligence をインストールするには、次の手順を実行します。

1. 第 4.1 項「インストーラの起動」で説明する手順に従って、インストーラを起動します。
2. 「ようこそ」画面に表示される Oracle Universal Installer に関する情報を確認し、「次へ」をクリックして続行します。

いくつかの前提条件がインストーラによって確認されます（詳細は、第 1.4.2 項「インストーラによる前提条件チェック」を参照）。

ターゲット・コンピュータに初めて Oracle 製品をインストールする場合は、インストール関連ファイル用のインベントリ・ディレクトリが作成されます（インベントリ・ディレクトリの詳細は、第 1.4.1.1 項「インストーラ・インベントリ・ディレクトリ」を参照）。

3. 「ファイルの場所の指定」画面で、次の操作を実行します。
  - a. 「ソース・パス」フィールドのソース・パスを確認します。

ソース・パスは products.xml ファイルへのフルパスで、製品はここからインストールされます。インストーラは、デフォルト・パスを検出して使用します。このパスは変更しないでください。
  - b. 「インストール先名」フィールドの Oracle ホーム名を確認します。

デフォルトの Oracle ホーム名を使用するか、他の名前を選択できます。

- c. 「インストール先パス」フィールドのインストール先パスを確認します。
- インストール先パスはディレクトリ名と Oracle ホーム・ディレクトリへのフルパスで、ここに製品がインストールされます。表示されるデフォルト名とパスを使用するか、他の名前を選択できます。
- インストール先パスは実在する絶対パスである必要があります。環境変数名や空白を含めることはできません。Oracle ホーム・ディレクトリの選択方法については、[第 1.2 項「Oracle ホームの考慮事項」](#)を参照してください。
- d. 「次へ」をクリックして続行します。
4. 「言語の選択」画面で、次の操作を実行します。
- a. Oracle Business Intelligence の実行時に表示する言語を選択します。
- ヒント:** 選択する言語が増えると、インストール時間も長くなります。ここで選択する言語によって、Discoverer Plus のヘルプで使用できる言語が決定します。異なる言語のヘルプを個別にインストールできることに注意してください（詳細は、[第 4.6.1 項「インストール後に Discoverer Plus の翻訳済ヘルプ・ファイルをインストール」](#)を参照）。
- b. 「次へ」をクリックして続行します。
5. インストールに使用できるメモリーがコンピュータに十分にあることを確認するように要求される場合があります。
- ハードウェア要件の詳細は、[第 2.1 項「ハードウェア要件」](#)を参照してください。
6. 「ポート構成オプションの指定」画面で「自動」ラジオ・ボタンを選択し、「次へ」をクリックして続行します。

---

**注意:** 「自動」オプションはほとんどのインストールで適切であるため、このオプションを選択することをお勧めします。ただし、staticports.ini という構成ファイルを指定すると、使用するポートを明示的に設定できます。staticports.ini ファイルのフォーマットと使用方法は、Oracle Application Server のインストレーション・ガイドを参照してください。

---

7. 「送信メール・サーバー情報の指定」画面で、次の操作を実行します。
- a. SMTP サーバーの詳細を指定します（例: smtp.oracle.com）。
- SMTP サーバーを指定すると、エンド・ユーザーは、Discoverer Viewer から電子メール・メッセージで Discoverer ワークシートを送信できます。
- ヒント:** 入力する SMTP サーバーの詳細が不明な場合、フィールドは空白のままにできます。インストール後に、Application Server Control を使用して SMTP サーバーを指定できます（詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照）。
- 注意:** Reports Services で使用される SMTP サーバーの指定の詳細は、[第 3.1 項「Reports Services で使用される SMTP サーバーの指定について」](#)を参照してください。
- b. 「次へ」をクリックして続行します。
8. 「インスタンス名と ias\_admin パスワードの指定」画面で、Application Server Control を使用して Oracle Business Intelligence を管理する際に使用する情報を入力します。
- a. 「インスタンス名」フィールドに、このインスタンスの名前を指定します。
- 指定した名前には、ホスト名とドメイン名が自動的に追加されることに注意してください。
- b. ias\_admin 管理者ユーザーのパスワードを指定します。
- c. ias\_admin 管理者ユーザーのパスワードを確認します。

- d. 「次へ」をクリックして続行します。
9. 「サマリー」画面で設定した内容を確認します。

設定を変更するには、「戻る」をクリックして適切な画面に戻ります。

**注意:** ディスク容量が不足している場合は、「必要な領域」に赤字で表示されます。
10. 「インストール」をクリックすると、ファイルのインストールが開始されます。

「インストール」画面が表示され、必要な Oracle Business Intelligence ファイルのコピーが開始されます。この画面では、インストール処理の進行状況を監視し、インストール・ログのフルパスを確認できます。インストール・ログの詳細は、[第 1.4.1.1 項「インストーラ・インベントリ・ディレクトリ」](#)を参照してください。

インストール処理を中断する場合は「インストールの中止」をクリックします。この場合は、製品すべてのインストールを停止する（デフォルト）か、特定のコンポーネントのインストールのみを停止するかを選択できます。製品すべてのインストールを停止することをお勧めします。特定のコンポーネントのインストールのみを停止すると、製品内の関連するコンポーネントが正常に動作しない場合があります。
11. 「設定権限」ダイアログ・ボックスが表示され、`root.sh` という構成スクリプトの実行を要求されます。
  - a. 新規のコンソール・ウィンドウを開き、`root` ユーザーでログインします。
  - b. `root.sh` スクリプトを実行し、画面の指示に従います。
  - c. スクリプトが完了した後、コンソール・ウィンドウを閉じます。
  - d. 「OK」をクリックして「設定権限」ダイアログ・ボックスを閉じます。

製品がインストールされると、「コンフィギュレーション・アシスタント」画面が表示されます。
12. 「コンフィギュレーション・アシスタント」画面で、自動的に実行された複数の Configuration Assistant のステータスを確認します。

Configuration Assistant を再試行するには（正常に完了しなかった場合など）、Configuration Assistant を選択して「再試行」をクリックします。

Configuration Assistant は中断しないことをお勧めします。

インストールが完了すると、インストール終了画面が表示されます。

**ヒント:** Oracle Business Intelligence の「ようこそ」ページを表示する URL をメモしてください。この URL は、別のコンポーネントを起動するために使用します（詳細は、[第 4.4 項「コンポーネントの起動」](#)を参照）。
13. 「終了」をクリックします。

インストール・プログラムの終了を確認するメッセージ・ダイアログ・ボックスが表示されます。
14. 「はい」をクリックしてインストーラを終了します。

Oracle Business Intelligence の「ようこそ」ページが表示されます（有効なデフォルト Web ブラウザがシステムで見つかった場合）。「ようこそ」ページからは、次の項目にアクセスできます。

  - クイック・ツアー
  - チュートリアル
  - サンプル
  - ドキュメント
  - Discoverer Plus および Discoverer Viewer（Discoverer Plus および Discoverer Viewer を使用する前に、インストール後の作業を 1 つ以上実行する必要がある場合があります。詳細は、[第 4.3 項「インストール後の作業」](#)を参照してください）。

---

---

**注意:** Oracle Business Intelligence の「ようこそ」ページが自動的に表示されない場合は Web ブラウザを起動し、前にメモした「ようこそ」ページを表示する URL を入力します。

---

---

## 4.3 インストール後の作業

Oracle Business Intelligence に関するインストール後の作業は、次のように分類されます。

- 第 4.3.1 項「一般的なチェックリスト」
- 第 4.3.2 項「すべての Discoverer コンポーネントのインストール後の作業」
- 第 4.3.3 項「コンポーネントに固有なインストール後の作業」

**注意:** 特に断りがないかぎり、ORACLE\_HOME はインストール時に使用した Oracle Business Intelligence のホーム・ディレクトリを表します。

### 4.3.1 一般的なチェックリスト

インストール後の一般的なチェックリストを確認し、インストールと環境に適用する作業を実行します。

- 第 4.3.1.1 項「更新」
- 第 4.3.1.2 項「TNS 名」
- 第 4.3.1.3 項「ポート番号」
- 第 4.3.1.4 項「Oracle Application Server Infrastructure との関連付け」

#### 4.3.1.1 更新

インストールが完了した後、Oracle MetaLink (<http://metalink.oracle.com>) で最新の認証とソフトウェアの更新を確認してください。Oracle MetaLink では、技術情報にアクセスしたり、オラクル社カスタマ・サポート・センターからのサポートを受けられます。

Oracle Business Intelligence に関する最新情報は、Oracle Technology Network (<http://www.oracle.com/technology/products/bi/index.html>) で確認してください。

また、Oracle Technology Network (<http://www.oracle.com/technology>) では、Oracle 製品や業界標準テクノロジーを使用するアプリケーションを作成、テストおよび配置する開発者向けのサービスや資料を入手できます。

#### 4.3.1.2 TNS 名

エンド・ユーザーが Discoverer を使用する前に、ユーザーがクエリーするデータを含むデータベース（または、EUL がインストールされるデータベース）の `tnsnames.ora` ファイルにエントリーを追加する必要があります。

`tnsnames.ora` ファイルと `sqlnet.ora` ファイルが `ORACLE_HOME/network/admin` ディレクトリにインストールされます。これらのファイルは、テキスト・エディタを使用して手動で更新したり、構成ツールである Oracle Net Configuration Assistant を使用して更新することもできます。構成ツールの詳細は、Oracle データベース・ドキュメント・ライブラリ内の『Oracle Net Services 管理者ガイド』を参照してください。

#### 4.3.1.3 ポート番号

インストーラによって、ポートが必要な Oracle Business Intelligence コンポーネントに、ポートが自動的に割り当てられます。コンポーネントのインストール時にポートの競合が検出されると、そのコンポーネントに割り当てられたポート番号の範囲内で、別のポート番号が選択されます。

表 4-1 デフォルトのポート番号

コンポーネント	デフォルトのポート番号
Discoverer	Oracle HTTP Server と同じポートを使用します (デフォルトはポート 80 (Windows の場合) またはポート 7777 (Solaris の場合)、ポート番号の範囲は 7777 ~ 7877)。

Oracle Business Intelligence コンポーネントで使用するポート番号は、Application Server Control を使用して表示および変更ができます。Discoverer で使用するポート番号の表示と変更の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照してください。

#### 4.3.1.4 Oracle Application Server Infrastructure との関連付け

Oracle Business Intelligence を使用するとき、Oracle Application Server Infrastructure を関連付けるかどうかは任意です。次のことができます。

- Infrastructure を関連付けずに Oracle Business Intelligence を実行できます。
- インストール後に、Oracle Business Intelligence を既存の Infrastructure に関連付けることができます。

Oracle Application Server Infrastructure は、Oracle Application Server 中間層の多くのコンポーネントを使用するための前提条件であることに注意してください。Oracle Business Intelligence を Oracle Application Server Infrastructure に関連付けないと、次のような多くの Oracle Business Intelligence 機能が使用不可になります。

- Discoverer Portlet Provider および Discoverer ポートレット
- Discoverer での Single Sign-On (SSO) 機能
- パブリックおよびプライベートの Discoverer 接続 (かわりに、Discoverer の「直接接続」ページが表示されます)

Oracle Business Intelligence と Oracle Application Server Infrastructure の関連付けの詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照してください。

## 4.3.2 すべての Discoverer コンポーネントのインストール後の作業

Discoverer エンド・ユーザーがデータ分析を開始する前に、次のいずれかまたは両方の項で説明する手順を完了する必要があります。

- [第 4.3.2.1 項「マルチディメンション分析の準備方法」](#)
- [第 4.3.2.2 項「リレーショナル分析の準備方法」](#)

### 4.3.2.1 マルチディメンション分析の準備方法

ユーザーが Discoverer を使用してマルチディメンション・データソースからデータをクエリーする前に、次の手順を完了する必要があります。

1. [第 4.3.2.1.1 項「Discoverer とともに使用するための Oracle9i Database リリース 2 の準備方法」](#) または [第 4.3.2.1.2 項「Discoverer とともに使用するための Oracle Database 10g Enterprise Edition の準備方法」](#) の説明に従って、データベースをインストールして準備します。
2. データ・ウェアハウスを設定します。

Oracle Business Intelligence Warehouse Builder を使用している場合は、『Oracle Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照してください。使用していない場合は、『Oracle 9i OLAP ユーザーズ・ガイド』(Oracle9i Database の場合) または『Oracle OLAP アプリケーション開発者ガイド』(Oracle Database 10g の場合) を参照してください。

次の作業を実行します。

- スキーマのインストール
- 適切なメタデータの作成
- (オプション) アナリティック・ワークスペースの作成とコンテンツの追加
- ユーザーへの適切な権限の付与 (ユーザーには、OLAP のディメンション・テーブル、メジャーおよびビューに対する SELECT 権限が必要)

Discoverer Plus OLAP のすべてのユーザーには D4OPUB ロールがあるため、OLAP\_USER ロールもあることに注意してください。OLAP\_USER ロールによって、データベース内の OLAP メタデータにアクセスできます。

3. Application Server Control を使用して、ユーザーが接続する Oracle OLAP データベース・インスタンスに Discoverer カタログをインストールします。

カタログのインストール方法と構成方法の詳細は、次を参照してください。

- 『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』
- Application Server Control のヘルプ・システム

4. Application Server Control を使用して、データベース・ユーザーを認可します (詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照)。

5. 必要に応じて、オプションの構成作業を実行します (詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照)。

6. エンド・ユーザーに、Discoverer を起動してマルチディメンション・データソースに接続するために必要な情報を提供します。

エンド・ユーザーに必要な構成と情報の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照してください。

#### 4.3.2.1.1 Discoverer とともに使用するための Oracle9i Database リリース 2 の準備方法

Oracle9i Database リリース 2 に対して実行するには、次の作業を完了します。

1. Oracle9i Database リリース 2 の Enterprise Edition をインストールしていない場合は、インストールします。

- 手順については、Oracle Technology Network から適切なプラットフォーム用の Oracle9i インストレーション・ガイドをダウンロードして参照してください。

<http://www.oracle.com/technology>

- データベースのサポート対象バージョンの詳細は、第 2.4 項「データベース要件」を参照してください。

**注意:** データベース・クライアントをインストールする際、別の Oracle ホーム・ディレクトリにインストールしてください。

2. 『Oracle OLAP 表キューブ集計と問合せ操作のベスト・プラクティス』に示す構成設定を使用して、データベースを構成します。このドキュメントにアクセスするには、パッチ・セット 2529822 をダウンロードします。BI Beans が正常に動作して実行されるように、構成設定には正確に従う必要があります。このドキュメントは必要に応じて更新されるため、新規パッチ・セットをダウンロードするたびに新規バージョンをチェックしてください。

3. 『Oracle9i OLAP ユーザーズ・ガイド』の説明に従って、適切な OLAP メタデータを定義します。このマニュアルは、Oracle Technology Network (<http://www.oracle.com/technology>) から入手できます。メタデータ作成用のツールである Oracle Enterprise Manager の OLAP 管理ツールのヘルプ・システムも参照してください。また、メタデータは Oracle Warehouse Builder を使用して作成することもできます。適切なメタデータを定義しない場合は OLAP クエリーを作成できません。

#### 4.3.2.1.2 Discoverer とともに使用するための Oracle Database 10g Enterprise Edition の準備方法

Oracle Database 10g Enterprise Edition に対して実行するには、次の作業を完了します。

1. Oracle Database 10g Enterprise Edition をインストールしていない場合は、インストールします。
  - 手順については、OTN (Oracle Technology Network) から適切なプラットフォーム用の Oracle Database 10g Enterprise Edition のインストレーション・ガイドをダウンロードして参照してください。  
  
`http://www.oracle.com/technology`
  - データベースのサポート対象バージョンの詳細は、第 2.4 項「データベース要件」を参照してください。
  - 既存の Discoverer カタログを Oracle Database 10g Enterprise Edition リリース 2 (10.2.0.1 以上) に移行する場合は、第 4.3.2.1.3 項「既存の Discoverer カタログを Oracle Database 10g Enterprise Edition リリース 2 に移行する方法」を参照してください。

**注意:** データベース・クライアントをインストールする際、別の Oracle ホーム・ディレクトリにインストールしてください。

2. 『Oracle OLAP 表キューブ集計と問合せ操作のベスト・プラクティス』に示す構成設定を使用して、データベースを構成します。BI Beans が正常に動作して実行されるように、構成設定には正確に従う必要があります。このドキュメントは必要に応じて更新されるため、新規パッチ・セットをダウンロードするたびに新規バージョンをチェックしてください。このドキュメントにアクセスするには、パッチ・セット 3760779 をダウンロードします。
3. 『Oracle OLAP アプリケーション開発者ガイド』の説明に従って、適切な OLAP メタデータを定義します。このマニュアルは、Oracle Technology Network (`http://www.oracle.com/technology`) から入手できます。適切なメタデータを定義しない場合は OLAP クエリーを作成できません。次のいずれかのツールを使用してメタデータを定義します。
  - Oracle Enterprise Manager の OLAP 管理ツール。詳細は、Oracle Enterprise Manager のヘルプ・システムを参照。
  - OracleBI Warehouse Builder。詳細は、『Oracle Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照。
  - Analytic Workspace Manager。詳細は、『Oracle OLAP アプリケーション開発者ガイド』を参照。

**4.3.2.1.3 既存の Discoverer カタログを Oracle Database 10g Enterprise Edition リリース 2 に移行する方法** 既存の Discoverer カタログを Oracle Database 10g Enterprise Edition リリース 2 (10.2.0.1 以上) に移行するには、次の手順を実行して、データベース・サーバー上の PL/SQL パッケージを更新する必要があります。

1. 次の手順でパッチをインストールします。
  - a. 次のディレクトリから d4o.jar を検索します。  
  
`BI_Home/sysman/webapps/emd/WEB-INF/lib`
  - b. d4o.jar から bibcoreb.pls ファイルをローカルのディレクトリに展開します。この jar にはパッケージ・スコープがあり、`oracle/dss/persistence/storagemanager/bi/scripts` ディレクトリに展開されます。
2. 次の手順でパッチを適用します。
  - a. コマンド・プロンプトで、次のように入力します。  
  
`cd oracle/dss/persistence/storagemanager/bi/scripts`
  - b. sqlplus を使用して、D4OSYS ユーザーとして D4OSYS スキーマに接続します。

- c. sqlplus プロンプトで、次のように入力します。

```
SQL> @bibcoreb.pls
```

この手順では、次のような出力があります。

```
Package body created.
Commit complete.
```

3. 次の手順でパッケージが有効であることを確認します。

- a. sqlplus セッションを開きます。  
b. 次の SQL コマンドを入力します。

```
SQL> column OBJECT_NAME format a30;
SQL> column STATUS format a10;
SQL> select object_name, status from user_objects where object_name='BISM_
CORE';
```

次のように表示される場合、パッチは正常に適用されています。

OBJECT_NAME	STATUS
BISM_CORE	VALID
BISM_CORE	VALID

#### 4.3.2.2 リレーショナル分析の準備方法

ユーザーが Discoverer を使用してリレーショナル・データソースからデータをクエリーするには、次のいずれかを使用して作成（またはアップグレード）された EUL へのアクセス権限が必要です。

- Discoverer EUL Command Line for Java（詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer EUL Command Line for Java ユーザーズ・ガイド』を参照）
- Oracle Business Intelligence Tools 10g 10.1.2 の CD-ROM または DVD に同梱されているバージョンの Discoverer Administrator（詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』を参照）

Discoverer リリース 9.0.2 または 9.0.4 から EUL をアップグレード（EUL リリース番号 5.0.x）する場合は、次の事項に注意してください。

- Discoverer リリース 10.1.2 の EUL（EUL リリース番号 5.1.x）は、前のリリースの EUL を上書きします（つまり、前のリリースを削除してアップグレードします）。
- 既存のユーザーは、アップグレード処理中またはアップグレード処理の完了後に、Discoverer リリース 9.0.x を使用して EUL にアクセスすることはできません。

したがって、アップグレードの前に、前のリリースの EUL のバックアップを作成してください。

EUL の作成とアップグレードの詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』を参照してください。

### 4.3.3 コンポーネントに固有なインストール後の作業

コンポーネントに固有なインストール後の作業を確認し、インストールと環境に適用する作業を実行します。

#### 4.3.3.1 Discoverer のインストール後の作業

この項では、Discoverer のインストール後の作業について説明します。

**4.3.3.1.1 分析の準備** Discoverer エンド・ユーザーがデータ分析を開始する前に、次のいずれかまたは両方の項で説明する手順を完了する必要があります。

- [第 4.3.2.2 項「リレーショナル分析の準備方法」](#)
- [第 4.3.2.1 項「マルチディメンション分析の準備方法」](#)

### 4.3.3.2 Discoverer Viewer のインストール後の作業

この項では、Discoverer Viewer のインストール後の作業について説明します。

**4.3.3.2.1 分析の準備** Discoverer エンド・ユーザーがデータ分析を開始する前に、次のいずれかまたは両方の項で説明する手順を完了する必要があります。

- [第 4.3.3.2.3 項「SMTP 構成」](#)
- [第 4.3.3.2.2 項「ワークブックの作成」](#)

**4.3.3.2.2 ワークブックの作成** Discoverer Viewer エンド・ユーザーは、Discoverer Plus または Discoverer Desktop を使用して作成したワークブックを使用してデータを分析します。Discoverer Viewer を使用してデータを分析するには、少なくとも 1 つのワークブックが作成されている必要があります。

**4.3.3.2.3 SMTP 構成** エンド・ユーザーが Discoverer Viewer から電子メール・メッセージで Discoverer ワークシートを送信できるようにするには、SMTP サーバーを使用するように Discoverer 中間層を構成する必要があります。インストール時に SMTP サーバーを指定していない場合は、後で指定することもできます（詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照）。

### 4.3.3.3 Discoverer Portlet Provider および Discoverer ポートレットのインストール後の作業

この項では、Discoverer Portlet Provider のインストール後の作業について説明します。

**4.3.3.3.1 分析の準備** Discoverer エンド・ユーザーがデータ分析を開始する前に、次のいずれかまたは両方の項で説明する手順を完了する必要があります。

- [第 4.3.3.3.2 項「リリース 10.1.2 の Oracle Application Server Infrastructure との関連付け」](#)
- [第 4.3.3.3.3 項「Discoverer Portlet Provider の登録」](#)

**4.3.3.3.2 リリース 10.1.2 の Oracle Application Server Infrastructure との関連付け** Discoverer Portlet Provider を使用するには、インストール後に Oracle Business Intelligence を Oracle Application Server リリース 10.1.2 のメタデータ・リポジトリに関連付ける必要があります。メタデータ・リポジトリは Oracle Application Server Infrastructure の一部です（詳細は、[第 4.3.1.4 項「Oracle Application Server Infrastructure との関連付け」](#) および『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照）。

**4.3.3.3.3 Discoverer Portlet Provider の登録** ユーザーが Discoverer ポートレットを Oracle Portal ページに追加するには、Discoverer Portlet Provider を Oracle Portal に登録する必要があります（詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照）。

## 4.4 コンポーネントの起動

Oracle Business Intelligence のコンポーネントを起動する前に、前の各項で説明したインストール後の一般的な作業およびコンポーネント固有の作業を完了しておいてください。コンポーネントのインストール後の作業を完了した後は、次の各項で説明するように、コンポーネントを起動できます。

- 第 4.4.1 項「Discoverer Plus の起動」
- 第 4.4.2 項「Discoverer Viewer の起動」
- 第 4.4.3 項「Discoverer Portlet Provider の起動」

### 4.4.1 Discoverer Plus の起動

Discoverer Plus OLAP および Discoverer Plus Relational を起動するには、次のいずれかを実行します。

- インストールの最後に表示される Oracle Business Intelligence の「ようこそ」ページで、「**Discoverer Plus**」リンクを選択します。
- Web ブラウザに次の URL を入力します。

`http://<host.domain>:<port>/discoverer/plus`

ここで、

- `<host.domain>` は、Oracle HTTP Server がインストールされているサーバー名とドメインです。
- `<port>` は、Oracle HTTP Server がインストールされているポート番号です。

たとえば、`http://myhost.mydomain:80/discoverer/plus` のように入力します。

**注意:** `<host.domain>` および `<port>` はインストールの最後に表示されます。

### 4.4.2 Discoverer Viewer の起動

Discoverer Viewer を起動するには、次のいずれかを実行します。

- インストールの最後に表示される Oracle Business Intelligence の「ようこそ」ページで、「**Discoverer Viewer**」リンクを選択します。
- Web ブラウザに次の URL を入力します。

`http://<host.domain>:<port>/discoverer/viewer`

ここで、

- `<host.domain>` は、Oracle HTTP Server がインストールされているサーバー名とドメインです。
- `<port>` は、Oracle HTTP Server がインストールされているポート番号です。

たとえば、`http://myhost.mydomain:80/discoverer/viewer` のように入力します。

**注意:** `<host.domain>` および `<port>` はインストールの最後に表示されます。

### 4.4.3 Discoverer Portlet Provider の起動

**注意:** Discoverer Portlet Provider を使用するには、インストール後に Oracle Business Intelligence を Oracle Application Server リリース 2 (10.1.2) のメタデータ・リポジトリに関連付ける必要があります。メタデータ・リポジトリは Oracle Application Server Infrastructure の一部です (詳細は、第 4.3.1.4 項「Oracle Application Server Infrastructure との関連付け」および『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照)。

Web ブラウザに次の URL を入力することで、Discoverer Portlet Provider が正常にインストールされたことを確認できます。

`http://host.domain:port/discoverer/portletprovider/`

ここで、

- `host.domain` は、Oracle HTTP Server がインストールされているサーバー名とドメインです。
- `port` は、Oracle HTTP Server がインストールされているポート番号です。

たとえば、`http://myhost.mydomain:80/discoverer/portletprovider` のように入力します。

**注意:** `host.domain` および `port` はインストールの最後に表示されます。

インストール後にエンド・ユーザーが Discoverer ポートレットを作成する前に、Oracle Portal にログインして Discoverer Portlet Provider を登録する必要があります。これによって、Oracle Portal ユーザーは Discoverer ポートレット（ワークシート、ワークシートのリスト、またはゲージ・ポートレット）を作成できます。詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Oracle Application Server Portal でのワークブック公開ガイド』を参照してください。

## 4.5 サンプルの使用

Discoverer 用の多くのサンプル・ワークブックを利用できます。これらのワークブックによって、マルチディメンション・データソースおよびリレーショナル・データソースのクエリー時に使用する Discoverer の機能が示されます。

サンプル・ワークブックを使用するには、次の手順を実行します。

1. `http://www.oracle.com/technology/products/bi/index.html` からサンプル・ワークブックをダウンロードします。
2. 使用しているマシン上のディレクトリにファイルを抽出します。
3. ディレクトリに格納されているインストール手順に従います。

## 4.6 ユーザー・ドキュメントとヘルプのインストールおよびアクセス

すべてのコンポーネントにはオンライン・ヘルプがあり、コンポーネントとともにインストールされます。コンポーネントの使用の詳細は、このオンライン・ヘルプを参照してください。Discoverer Plus の場合は、Oracle Business Intelligence のインストール後に追加の翻訳済ヘルプ・ファイルもインストールできます（詳細は、第 4.6.1 項「インストール後に Discoverer Plus の翻訳済ヘルプ・ファイルをインストール」を参照）。

コンポーネントによっては、さらにドキュメントが Oracle Technology Network (`http://www.oracle.com/technology/products/bi`) にある場合があります。このサイトでは、ホワイト・ペーパー、最新版のドキュメント、その他の付属資料も入手できます。

次の Oracle Business Intelligence ドキュメントは、Oracle Business Intelligence の CD-ROM または DVD から利用できます。

- このマニュアル（Oracle Business Intelligence のインストレーション・ガイド）
- Oracle Business Intelligence のリリース・ノート

Oracle Business Intelligence ドキュメントを CD-ROM または DVD から直接表示するには、次の手順を実行します。

1. Web ブラウザを使用して、CD-ROM または DVD の doc ディレクトリにある `index.htm` ファイルを開きます。
2. タブをクリックします。
3. ドキュメント・タイトルの横にある「HTML」または「PDF」リンクをクリックすると、ドキュメントの内容が表示されます。

## 4.6.1 インストール後に Discoverer Plus の翻訳済ヘルプ・ファイルをインストール

インストール時には、選択した言語の Discoverer Plus ヘルプ・ファイルがインストールされます。インストール時に選択していない言語のヘルプ・ファイルをユーザーが必要な場合は、そのヘルプ・ファイルを個別にインストールできます。

Discoverer Plus ヘルプ・ファイルは、Oracle Business Intelligence の CD-ROM または DVD の /extras ディレクトリから jar ファイルとして使用できます。Discoverer Plus OLAP と Discoverer Plus Relational のヘルプ・ファイルには、それぞれ別のサブディレクトリがあり、言語ごとに異なる jar ファイルがあります。

Oracle Business Intelligence のインストール後に別の言語のヘルプ・ファイルをインストールするには、次の手順を実行します。

1. Oracle Business Intelligence の CD-ROM または DVD の適切なディレクトリに移動します。

Discoverer Plus OLAP および Discoverer Plus Relational のそれぞれに、次のサブディレクトリがあります。

- Discoverer Plus OLAP ヘルプ・ファイルの場合は、/extras/help/d4o ディレクトリに移動します。
- Discoverer Plus Relational ヘルプ・ファイルの場合は、/extras/help/plus ディレクトリに移動します。

2. 表 4-2 を使用して、必要な言語の翻訳済ヘルプ・ファイルが含まれる jar ファイルを識別します。

次に示すように、言語ごとに異なる jar ファイルがあります。

- Discoverer Plus OLAP ヘルプ・ファイルが含まれる jar ファイルは、/extras/help/d4o ディレクトリにあり、名前は d4ohelp\_locale\_code.jar です。
- Discoverer Plus Relational ヘルプ・ファイルが含まれる jar ファイルは、/extras/help/plus ディレクトリにあり、名前は plushelp\_locale\_code.jar です。

locale\_code は、次の表に示すいずれかの接尾辞です。

**表 4-2 Discoverer Plus ヘルプの jar ファイルのロケール・コード接尾辞**

ロケール・コード接尾辞	言語	ロケール・コード接尾辞	言語
_ar	アラビア語	_ko	韓国語
_cs	チェコ語	_nl	オランダ語
_da	デンマーク語	_no	ノルウェー語
_de	ドイツ語	_pl	ポーランド語
_el	ギリシャ語	_pt	ポルトガル語
_es	スペイン語	_pt_BR	ポルトガル語 (ブラジル)
_es_ES	スペイン語 (イベリア)	_ro	ルーマニア語
_fi	フィンランド語	_ru	ロシア語
_fr	フランス語	_sk	スロバキア語
_fr_CA	フランス語 (カナダ)	_sv	スウェーデン語
_hu	ハンガリー語	_th	タイ語
_it	イタリア語	_tr	トルコ語

表 4-2 Discoverer Plus ヘルプの jar ファイルのロケール・コード接尾辞 (続き)

ロケール・ コード接尾辞	言語	ロケール・ コード接尾辞	言語
_iw	ヘブライ語	_zh_CN	簡体字中国語
_ja	日本語	_zh_TW	繁体字中国語

3. 中間層マシンの ORACLE\_HOME/discoverer/plus\_files/help ディレクトリに、必要な jar ファイルを抽出します。

これで、その言語のヘルプが使用可能になります。

## 4.6.2 インストール後に必要な追加のフォントをインストール

インストール時に言語のサブセットをインストールした場合は、Discoverer で必要なすべてのフォントがインストールされない場合があります。必要なすべてのフォントがインストールされていないと (たとえば、Albany フォントの ALBANWTJ.TTF、ALBANWTK.TTF)、Discoverer では一部のテキストが制御文字で表示される場合があります。

必要な追加フォントは、MRUA およびユーティリティの CD-ROM または DVD の /utilities/fonts フォルダに格納されています。

Oracle Business Intelligence のインストール後に、必要な追加のフォントをインストールするには、次の手順を実行します。

1. MRUA およびユーティリティの CD-ROM/DVD の /utilities/fonts ディレクトリに移動します。
2. MRUA およびユーティリティの CD-ROM または DVD の /utilities/fonts ディレクトリの内容を、Oracle Business Intelligence をインストールしたコンピュータの ORACLE\_HOME/jdk/jre/lib/fonts フォルダにコピーします。

## 4.7 次の作業

インストール後に、次の作業を実行できます。

- クイック・ツアーを実行して、Oracle Business Intelligence の概要を理解します。クイック・ツアーを起動するには、次のように実行します。
  - Web ブラウザに次の URL を入力します。

`http://host.domain:port/quicktour/index.htm`

ここで、

- \* `host.domain` は、Oracle HTTP Server がインストールされているサーバー名とドメインです。
- \* `port` は、Oracle HTTP Server がインストールされているポート番号です。

---

**注意:** `host.domain` および `port` はインストールの最後に表示されます。

---

- 『Oracle Business Intelligence 概要』を読みます (詳細は、第 4.6 項「ユーザー・ドキュメントとヘルプのインストールおよびアクセス」を参照)。
- コンポーネント固有のユーザー・ドキュメントを読みます (詳細は、第 4.6 項「ユーザー・ドキュメントとヘルプのインストールおよびアクセス」を参照)。
- Oracle Business Intelligence の使用を開始します (詳細は、第 4.4 項「コンポーネントの起動」を参照)。

---

これらのすべてのリソースには、Oracle Business Intelligence の「ようこそ」ページからアクセスできます。Oracle Business Intelligence の「ようこそ」ページを表示するには、次のように実行します。

- Web ブラウザに次の URL を入力します。

`http://<host.domain>`

*host.domain* の定義は前述のとおりです。



---

---

## Oracle Business Intelligence の 削除と再インストール

この章では、Oracle Business Intelligence を削除する手順について説明します。複数またはすべてのコンポーネントを削除する場合は、この章で説明する順序に従ってください。

この章では、実行する順序に従って削除手順を説明します。

- [第 5.1 項「Oracle Business Intelligence の削除」](#)
- [第 5.2 項「Oracle Business Intelligence の再インストール」](#)

## 5.1 Oracle Business Intelligence の削除

**注意:** この項では、マシンから Oracle Business Intelligence インストールを削除する方法について説明します。関連付けられた Oracle Application Server Infrastructure インストールを削除する場合は、Oracle Business Intelligence の削除とは別に実行する必要があります（詳細は、Oracle Application Server のインストレーション・ガイドを参照）。

使用しているコンピュータから Oracle Business Intelligence を削除する場合は、必ず Oracle Universal Installer を使用してください。次に、削除処理の手順を説明します。

インストーラを使用して Oracle Business Intelligence を削除するには、次の手順を実行します。

1. 次の手順に従って、削除処理を開始する前に Oracle サービスをすべて停止します。
  - a. 新規のコンソール・ウィンドウを開きます。
  - b. `Oracle Home/opmn/bin` ディレクトリに移動し、次のように入力します。

```
opmnctl stopall
```
  - c. `Oracle Home` ディレクトリに移動し、次のように入力します。

```
emctl stop iasconsole
```
  - d. コンソール・ウィンドウを閉じます。
2. 第 4.1 項「インストーラの起動」で説明する手順に従って、インストーラを起動します。

コンピュータにインストールされているすべての Oracle 製品が表示されます。製品は必要だけ削除できます。ここで説明する内容は、Oracle Business Intelligence の削除にのみ適用されます。
3. Oracle Universal Installer の「ようこそ」画面で、「製品の削除」をクリックします。
4. 「インベントリ」画面のリストから、Oracle Business Intelligence 10g 10.1.2.0.2 が含まれる Oracle ホームを選択します。

製品名の前にプラス記号 (+) またはマイナス記号 (-) がある場合は、下位のコンポーネントやファイルを展開または縮小できます。

Oracle Business Intelligence のコンポーネントを個別に削除することはできません。1 つのコンポーネントを選択しても、Oracle Business Intelligence のすべてのコンポーネントが削除されます。
5. 「製品情報」ボックスに表示されている Oracle ホームへのフルパスをメモしてください。この情報は、インストーラが完了してから、ファイルやフォルダを手動で削除する場合に必要になります。
6. 準備ができたなら「削除」をクリックします。
7. 「確認」画面で、削除対象として選択した製品を確認し、「はい」をクリックすると、削除処理が開始されます。

選択内容を変更する場合は、「いいえ」をクリックして「インベントリ」画面に戻ります。

「削除」進行状況バーが表示され、削除処理を監視できます。削除を中断する場合は「取消」をクリックします。削除処理の中断を確認するメッセージが表示されたときは「はい」をクリックします。
8. 「削除時のインプット」ダイアログ・ボックスが表示され、セキュアなコマンドラインの値の入力を要求された場合は、「OK」をクリックして続行します。

削除が完了すると、再び「インベントリ」画面が表示されます。
9. 「閉じる」をクリックしてこの画面を終了し、「ようこそ」画面に戻ります。
10. 「ようこそ」画面で「取消」をクリックしてインストーラを終了します。インストーラを終了する確認画面が表示されたときは「はい」をクリックします。

---

---

**注意：** この時点で、Oracle Business Intelligence に関連付けられているファイルは、まだ Oracle ホーム・ディレクトリに存在しています。Oracle Business Intelligence が他の製品（Oracle Business Intelligence Tools など）と Oracle ホーム・ディレクトリを共有している場合は、その Oracle ホーム・ディレクトリから他のファイルまたはディレクトリを削除しないことをお勧めします。Oracle Business Intelligence が他の製品と Oracle ホーム・ディレクトリを共有していない場合は、Oracle ホーム・ディレクトリ全体を削除できます。

---

---

11. (オプション) 注意を読んだ後に、前の手順でメモした場所にある Oracle ホームに移動し、残っているファイルやフォルダを削除します。

これで Oracle Business Intelligence が削除されました。

## 5.2 Oracle Business Intelligence の再インストール

すでにインストールされているコンポーネントは上書きされません。Oracle Business Intelligence を完全に再インストールする場合は、[第 5.1 項「Oracle Business Intelligence の削除」](#)で説明する手順に従って製品を完全に削除した後に、[第 4 章「Oracle Business Intelligence のインストール」](#)で説明する手順に従って製品をインストールする必要があります。



---

---

## トラブルシューティング

この付録では、インストールでエラーまたは問題が発生した場合に使用する参照情報について説明します。この付録の内容は次のとおりです。

- [第 A.1 項「始める前に」](#)
- [第 A.2 項「インストールに関するトラブルシューティング」](#)
- [第 A.3 項「Discoverer の診断およびロギング・ツールの使用」](#)

## A.1 始める前に

Oracle Business Intelligence のインストール中に発生した問題を解決する前に、次の説明をお読みください。

- 第 A.1.1 項「ハードウェアの要件とインストール前の要件の確認」
- 第 A.1.2 項「リリース・ノートの確認」

### A.1.1 ハードウェアの要件とインストール前の要件の確認

最初に、Oracle Business Intelligence のハードウェアとソフトウェアの要件、およびインストール前の作業を確認します。

- 使用しているコンピュータが、第 2.1 項「ハードウェア要件」で指定されているハードウェア要件を満たしていることを確認します。
- 使用中のオペレーティング・システム環境が Oracle Business Intelligence に対応していることを確認します。対応しているオペレーティング環境の一覧は、第 2.2 項「ソフトウェア要件」を参照してください。
- 第 1.3 項「インストール前の作業」の冒頭で指定されている、製品レベルでのインストール前の要件がすべて完了していることを確認します。
- インストールする各コンポーネントについて、コンポーネント・レベルでのインストール前の要件がすべて完了していることを確認します。これらの要件については、第 1.3.3 項「コンポーネントに固有なインストール前の作業」を参照してください。

### A.1.2 リリース・ノートの確認

インストールの前に Oracle Business Intelligence のリリース・ノートをお読みください。Oracle Business Intelligence のリリース・ノートは、次の場所から入手できます。

- Oracle Business Intelligence の CD-ROM（詳細は、第 4.6 項「ユーザー・ドキュメントとヘルプのインストールおよびアクセス」を参照）
- OTN (<http://www.oracle.com/technology/products/bi/index.html>)

## A.2 インストールに関するトラブルシューティング

Oracle Business Intelligence のインストール中にエラーが発生した場合は、次の手順に従います。

- インストーラは終了しないでください。インストーラを実行したままにしておくと、インストール・ログ・ファイルを簡単に検索できます。
- 入力の誤り：インストール画面のいずれかで誤った情報を入力した場合は、「戻る」をクリックしてその画面まで戻り、情報を修正してからインストールを続行します。
- コピーのエラー：ファイルのコピーまたはリンク時にエラーが報告された場合は、次の手順に従います。
  1. エラーの内容をメモし、インストール・ログを参照して原因を調べます。インストール・ログは、インベントリ・ディレクトリのサブディレクトリ `/logs` にあり、ファイル名は次のとおりです。
    - `installActions timestamp.log`
    - `oraInstall timestamp.err`
    - `oraInstall timestamp.out`

文字列 `timestamp` は、インストールの開始時にファイル名に付加される値です。`timestamp` の形式は、`yyyy-mm-dd_hh-mm-ss[AM|PM]` です。それぞれの内容は次のとおりです。

- `yyyy` は、2004 のように、現在の年を表します。
- `mm` は、現在の月を表します。7 月の場合は 07 になります。
- `dd` は、現在の日付を表します。15 日の場合は 15 になります。
- `hh`、`mm` および `ss` はそれぞれ、インストールが開始された時間、分、秒を表します。
- `[AM/PM]` は、インストールが開始された時刻が午前 (AM) であるか午後 (PM) であるかを表します。

インベントリ・ディレクトリの場所は、使用しているコンピュータに、Oracle 製品を最初にインストールしたときに指定されます。ディレクトリとその検索方法の詳細は、[第 1.4.1.1 項「インストーラ・インベントリ・ディレクトリ」](#)を参照してください。

2. [第 5 章「Oracle Business Intelligence の削除と再インストール」](#)に記載されている手順に従って、失敗したインストールを削除します。
3. エラーの原因となった問題を修正します。
4. Oracle Business Intelligence のインストールを再度開始します。

---

**注意：** 追加の言語サポートを提供するには、Oracle Business Intelligence のインストール後に、不足フォントのインストールが必要な場合があります。詳細は、[第 4.6.2 項「インストール後に必要な追加のフォントをインストール」](#)を参照してください。

---

## A.3 Discoverer の診断およびロギング・ツールの使用

Discoverer には多数の診断ツールが用意されています。詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照してください。



---

---

## 非対話型インストールと サイレント・インストール

この付録では、Oracle Business Intelligence の非対話型インストールとサイレント・インストールについて説明します。この付録の内容は次のとおりです。

- 第 B.1 項 「非対話型インストール」
- 第 B.2 項 「サイレント・インストール」
- 第 B.3 項 「インストール前」
- 第 B.4 項 「レスポンス・ファイルの作成」
- 第 B.5 項 「インストールの開始」
- 第 B.6 項 「インストール後」
- 第 B.7 項 「サイレント・モードを使用した削除」

## B.1 非対話型インストール

Oracle Business Intelligence の非対話型インストールは、Oracle Universal Installer にレスポンス・ファイルを指定することによって実行します。レスポンス・ファイルは、インストーラに指定するインストール設定を含むテキスト・ファイルです。

インストーラはこのレスポンス・ファイルに格納されている変数とパラメータ値を使用して、一部またはすべてのインストーラ・ユーザー・プロンプトに回答します。画面表示があり、すべてのインストーラ・プロンプトに回答していない場合は、インストール中に情報の入力が必要になる場合があります。

初めて Oracle Business Intelligence をインストールする場合は、インストールを開始する前に `oraInst.loc` ファイルを作成する必要があります。ファイル作成の詳細は、[第 B.3 項「インストール前」](#) を参照してください。Oracle Business Intelligence をインストールした後は、`root.sh` スクリプトを実行する必要があります。`root.sh` スクリプトによって環境変数の設定が検出され、ローカルの `bin` ディレクトリへのフルパスが入力可能になります。

インストール時に特定の画面を監視する場合は、Oracle Business Intelligence の非対話型インストーラを使用します。

また、Oracle Business Intelligence のインストールをリモートの位置からコマンドラインを使用して実行する場合は、非対話型インストールを使用できます。

## B.2 サイレント・インストール

Oracle Business Intelligence のサイレント・インストールは、Oracle Universal Installer にレスポンス・ファイルを指定し、コマンドラインで `-silent` フラグを指定することによって実行します。レスポンス・ファイルはテキスト・ファイルです。

インストーラはこのレスポンス・ファイルに格納されている変数とパラメータ値を使用して、すべてのインストーラ・プロンプトに回答します。レスポンス・ファイルには、すべてのインストーラ・プロンプトに対する回答を格納します。サイレント・インストールでは、画面の表示はありません。

初めて Oracle Business Intelligence をインストールする場合は、インストールを開始する前に `oraInst.loc` ファイルを作成する必要があります。ファイル作成の詳細は、[第 B.3 項「インストール前」](#) を参照してください。Oracle Business Intelligence をインストールした後は、`root.sh` スクリプトを実行する必要があります。`root.sh` スクリプトによって環境変数の設定が検出され、ローカルの `bin` ディレクトリへのフルパスが入力可能になります。

複数のコンピュータに類似したインストールが存在する場合は、Oracle Business Intelligence のサイレント・インストールを使用してください。また、Oracle Business Intelligence のインストールをリモートの位置からコマンドラインを使用して実行する場合は、サイレント・インストールを使用してください。サイレント・インストールでは画面表示やユーザーによる入力がないため、Oracle Business Intelligence のインストールを監視する必要はありません。

## B.3 インストール前

使用しているコンピュータ上に `oraInst.loc` ファイルが存在しない場合は、Oracle Business Intelligence のサイレント・インストールと非対話型インストールを開始する前に、`oraInst.loc` ファイルを作成する必要があります。

`oraInst.loc` ファイルは通常、`/etc` または `/var/opt` ディレクトリに格納されています。このファイルは、インストール時に Oracle Universal Installer によって使用されます。

`root` ユーザーで、`oraInst.loc` ファイルを `/etc` または `/var/opt` ディレクトリ内に作成します。`oracle` グループは、インストールを実行するグループです。

`orainst.loc` ファイルに、次のテキスト行を入力します。

```
inventory_loc=<full_path>/oraInventory
```

たとえば、`inventory_loc=/export/home/bi/oraInventory` などです。

oraInst.loc ファイルは、インベントリ・ファイルの inventory\_loc の場所を指定します。Oracle ホームに oraInst.loc ファイルが存在しない場合は、そのファイルに oracle グループに対する読取りおよび書込み権限があるかどうかを確認してください。

注意: Solaris 上で、非対話型モードまたはサイレント・モードでインストールするには、TMP= 環境変数の設定が必要です (例: TMP=/export/home/bi/tmp)。

## B.4 レスポンス・ファイルの作成

サイレント・インストールまたは非対話型インストールの前には、インストール・パックの Disk 1 にあるレスポンス・ファイルのテンプレートを 사용하여、実行するインストール固有の情報を提供する必要があります。

Oracle Business Intelligence の CD-ROM の /Disk1/stage/Response ディレクトリにある、レスポンス・ファイルのテンプレート

oracle.business.intelligence.as.BIServices.rsp を開き、テキスト・エディタを使用して変更します。

---

**注意:** この oracle.business.intelligence.as.BIServices.rsp ファイルは、my\_responses.rsp など、異なるファイル名で保存すると、インストールのレスポンス・ファイルとして使用することもできます。

---

レスポンス・ファイルのパラメータの定義は、レスポンス・ファイル自体に記述されています。レスポンス・ファイルでは、次の変数に値を指定する必要があります。

- COMPONENT\_LANGUAGES
- FROM\_LOCATION
- LOCATION\_FOR\_DISK1
- LOCATION\_FOR\_DISK2
- ORACLE\_HOME
- ORACLE\_HOME\_NAME
- oracle.iappserver.instance:szl\_InstanceInformation
- UNIX\_GROUP\_NAME (Solaris インストールのみ)
- SHOW\_ROOTSH\_CONFIRMATION (Solaris インストールのみ)

注意: この値は、false (つまり、SHOW\_ROOTSH\_CONFIRMATION=false) に設定する必要があります。

次の点に注意してください。

- レスポンス・ファイルを適切に構成せずにサイレント・インストールを試みると、インストーラは失敗します。
- ブール型パラメータには、true または false のどちらかを指定することをお勧めします。

### B.4.1 レスポンス・ファイルの例

次に、Oracle Business Intelligence のサイレント・インストールで使用するレスポンス・ファイルの抜粋を示します。

```
RESPONSEFILE_VERSION=2.2.1.0.0
UNIX_GROUP_NAME="oracleqa"
FROM_LOCATION="/home/BI_1012_Install/Disk1/stage/products.xml"
ORACLE_HOME="/home/BI_1012"
ORACLE_HOME_NAME="BI_1012"
SHOW_SPLASH_SCREEN=true
SHOW_WELCOME_PAGE=false
```

```

SHOW_COMPONENT_LOCATIONS_PAGE=false
SHOW_CUSTOM_TREE_PAGE=false
SHOW_SUMMARY_PAGE=false
SHOW_INSTALL_PROGRESS_PAGE=true
SHOW_REQUIRED_CONFIG_TOOL_PAGE=false
SHOW_CONFIG_TOOL_PAGE=false
SHOW_ROOTSH_CONFIRMATION=false
SHOW_END_SESSION_PAGE=false
SHOW_RELEASE_NOTES=false
SHOW_EXIT_CONFIRMATION=false
NEXT_SESSION=false
NEXT_SESSION_ON_FAIL=false
SHOW_DEINSTALL_CONFIRMATION=false
SHOW_DEINSTALL_PROGRESS=false
ACCEPT_LICENSE_AGREEMENT=true
TOPLEVEL_COMPONENT={"oracle.business.intelligence.as", "10.1.2.0.0"}
DEINSTALL_LIST={"oracle.business.intelligence.as", "10.1.2.0.0"}
DEPENDENCY_LIST={"oracle.java.j2ee.core:10.1.2.0.0"}
COMPONENT_LANGUAGES={"en", "ko"}

```

## B.5 インストールの開始

インストーラでレスポンス・ファイルを使用するには、インストーラの起動時に、使用するレスポンス・ファイルの場所をパラメータとして指定します。

非対話型インストールを実行するには、次のように入力します。

```

prompt> setenv DISPLAY ias_hostname:0.0
prompt> ./runInstaller -responseFile absolute_path_and_filename

```

サイレント・インストールを実行するには、次のように入力します。

```

prompt> ./runInstaller -silent -responseFile absolute_path_and_filename

```

## B.6 インストール後

非対話型インストールとサイレント・インストールの成功または失敗は、installActions<time\_stamp>.log ファイルに記録されます。また、サイレント・インストールでは silentInstall<time\_stamp>.log ファイルが作成されます。これらのログ・ファイルは、インストール時に oraInventory ディレクトリ内に作成されます。

インストールに成功すると、silentInstall<time\_stamp>.log ファイルに次の行が記録されます。

```
The installation of Oracle Business Intelligence 10g was successful.
```

## B.7 サイレント・モードを使用した削除

インストールに使用したレスポンス・ファイルに、サイレント・モードによる削除のパラメータを追加すると、サイレント・モードを使用して Oracle Business Intelligence を削除できます。インストール用のレスポンス・ファイルに次のパラメータを追加します。

```
REMOVE_HOMES={"<ORACLE_HOME to be removed>"}
```

サイレント・モードを使用した削除を実行するには、コマンドの入力時に、パラメータ -deinstall を次のように使用します。

```
prompt> ./runInstaller -silent -deinstall -responseFile absolute_path_and_filename
```

---

---

## デフォルトのポート番号

デフォルトでは、インストーラによって、デフォルトのポート番号のセットからポート番号がコンポーネントに割り当てられます。この付録には、これらのポート番号のリストが記載されています。

異なるポート番号のセットを使用する場合は、`staticports.ini` というファイルを作成する必要があり、このファイルに使用するポート番号を記述します。詳細は、[第 3.8.3 項「カスタム・ポート番号の使用（静的ポート機能）」](#)を参照してください。

## C.1 デフォルトのポート番号を割り当てる方法

インストーラによって、デフォルトのポート番号が、次の方法で各コンポーネントに割り当てられます。

1. デフォルトのポート番号が使用中かどうかを確認されます。使用中でなければ、そのデフォルトのポート番号がコンポーネントに割り当てられます。
2. デフォルトのポート番号が、Oracle 製品または実行中のアプリケーションによって、すでに使用されている場合は、ポート番号の範囲で最も小さいポート番号が試されます。利用可能なポート番号が見つかるまで、その範囲にあるポート番号が試されます。

## C.2 デフォルトのポート番号

表 C-1 に、コンポーネントに対するデフォルトのポート番号を示します。最後の列の `staticports.ini` での名前は、`staticports.ini` ファイルに記載されるコンポーネント名を示しています。この名前を使用すると、デフォルトのポート番号を書き換えることが可能になります。詳細は、第 3.8.3 項「カスタム・ポート番号の使用（静的ポート機能）」を参照してください。

表 C-1 デフォルトのポート番号と範囲（コンポーネントごとにグループ化）

コンポーネント	デフォルトのポート	ポート番号の範囲	<code>staticports.ini</code> での名前
<b>Oracle Process Manager and Notification Server (OPMN)</b>			
Oracle Notification Server Request Port	6003	6003 - 6099	Oracle Notification Server Request port
Oracle Notification Server Request Port	6100	6100 - 6199	Oracle Notification Server Local port
Oracle Notification Server Request Port	6200	6200 - 6299	Oracle Notification Server Remote port
<b>Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J)</b>			
OC4J AJP	12501	12501 - 12600	<code>staticports.ini</code> では設定不可。
OC4J RMI	12401	12401 - 12500	<code>staticports.ini</code> では設定不可。
JMS	12601	12601 - 12700	<code>staticports.ini</code> では設定不可。
IIOP	13301	13301 - 13400	<code>staticports.ini</code> では設定不可。
IIOPS1	13401	13401 - 13500	<code>staticports.ini</code> では設定不可。
IIOPS2	13501	13501 - 13600	<code>staticports.ini</code> では設定不可。
<b>OracleBI Discoverer</b>			
OracleBI Discoverer	--	--	Oracle HTTP Server と同じポートを使用。
OracleBI Discoverer OSAgent	16001	16001 - 16020	Discoverer OSAgent port
<b>OracleAS Forms Services</b>			
OracleAS Forms Services	Oracle HTTP Server と同じポートを使用		
<b>Oracle HTTP Server</b>			
Oracle HTTP Server Listener (OracleAS Web Cache は構成しない)	7777	7777 - 7877	Oracle HTTP Server Listen port

表 C-1 デフォルトのポート番号と範囲（コンポーネントごとにグループ化）（続き）

コンポーネント	デフォルトのポート	ポート番号の範囲	staticports.ini での名前
Oracle HTTP Server Listener (SSL)	4443	4443 - 4543	Oracle HTTP Server Listen (SSL) port
Oracle HTTP Server Listener (非 SSL、OracleAS Web Cache は構成する)	7778	7777 - 7877	Oracle HTTP Server port
Oracle HTTP Server Listener (SSL、OracleAS Web Cache は構成する)	4444	4443 - 4543	Oracle HTTP Server SSL port
Java Object Cache	7000	7000 - 7099	Java Object Cache port
DCM Java Object Cache	7100	7100 - 7199	DCM Java Object Cache port
DCM Discovery	7100	7100 - 7199	DCM Discovery ポート
SOAP サーバー	9998	9998 - 9999	staticports.ini では設定不可。
Port Tunneling	7501	7501 - 7599	staticports.ini では設定不可。
Oracle HTTP Server 診断ポート	7200	7200 - 7299	Oracle HTTP Server Diagnostic port
<b>OracleAS Portal</b>			
OracleAS Portal	--	--	Oracle HTTP Server と同じポートを使用。
<b>OracleAS Single Sign-On</b>			
OracleAS Single Sign-On	--	--	Oracle HTTP Server と同じポートを使用。
<b>OracleAS Reports Services</b>			
SQL*Net (6i の下位互換性の目的で維持)	14040	14040 - 14049	Reports Services SQL*Net port
検出サービス	14021	14021 - 14030	Reports Services discoveryService port
Bridge	14011	14011 - 14020	Reports Services bridge port
<b>OracleAS Web Cache</b>			
OracleAS Web Cache - HTTP Listener	7777	7777 - 7877	Web Cache HTTP Listen port
OracleAS Web Cache - HTTP Listener (SSL)	8250	8250 - 8350	Web Cache HTTP Listen (SSL) port
OracleAS Web Cache 管理	9400	9400 - 9499	Web Cache Administration port
OracleAS Web Cache の無効化	9401	9400 - 9499	Web Cache Invalidation port
OracleAS Web Cache Statistics	9402	9400 - 9499	Web Cache Statistics port
<b>OracleAS Wireless</b>			
OracleAS Wireless	--	--	Oracle HTTP Server と同じポートを使用。
<b>Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control</b>			
Application Server Control	1156	1156; 1810 - 1829	Application Server Control port
Oracle Management Agent	1157	1157; 1830 - 1849	staticports.ini では設定不可。

表 C-1 デフォルトのポート番号と範囲（コンポーネントごとにグループ化）（続き）

コンポーネント	デフォルトのポート	ポート番号の範囲	staticports.ini での名前
Application Server Control - RMI	1850	1850 - 1869	Application Server Control RMI port
Application Server Control - SSL	1810	1810 - 1829	SSL 用に Application Server Control を構成した場合、このポート番号はインストール後に割り当てられます。詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。
Enterprise Manager コンソールの HTTP ポート (orcl)	5500		staticports.ini では設定不可。
Enterprise Manager エージェントのポート (orcl)	1831		staticports.ini では設定不可。
ログ・ローダー	44000	44000 - 44099	Log Loader port
<b>Oracle Internet Directory</b>			
Oracle Internet Directory	389	13060 - 13129	Oracle Internet Directory port
Oracle Internet Directory (SSL)	636	13130 - 13199	Oracle Internet Directory (SSL) port
<b>OracleAS Certificate Authority (OCA)</b>			
Server Authentication Virtual Host	6600	6600 - 6619	Oracle Certificate Authority SSL Server Authentication port
Mutual Authentication Virtual Host	6601	6600 - 6619	Oracle Certificate Authority SSL Mutual Authentication port

# 索引

## A

Authorized Problem Analysis Report  
「APAR」を参照

## B

Business Intelligence  
コンポーネントの概要, 1-2

## C

CD-ROM  
ハード・ドライブへのコピー, 3-24  
CLASSPATH 環境変数, 3-21

## D

dba グループ, 3-19  
Discoverer Plus  
概要, 1-2  
Discoverer Plus OLAP  
optimizer\_features\_enable の設定, 2-9  
Discoverer Portlet Provider および Discoverer ポート  
レット  
概要, 1-3  
Discoverer Viewer  
概要, 1-2  
DISPLAY 環境変数, 3-22  
DVD  
ハード・ドライブへのコピー, 3-24

## E

/etc/hosts ファイル, 3-23  
/etc/system ファイル, 3-9, 3-12

## G

groups コマンド, 3-20

## H

httpd.conf ファイル, 3-16

## I

installActions.log, B-4

instfix コマンド, 2-7

IP  
複数の IP アドレスを持つコンピュータへのインス  
トール, 3-24

## J

J2SE Patch Cluster, 3-7

## L

LD\_LIBRARY\_PATH 環境変数, 3-21

## O

oinstall グループ, 3-19  
optimizer\_features\_enable の設定, 2-9  
Oracle Business Intelligence  
インストール, 4-2  
再インストール, 5-3  
削除, 5-2  
Oracle Business Intelligence の再インストール, 5-3  
Oracle Business Intelligence の削除, 5-2  
Oracle HTTP Server  
静的ポートの構成, 3-16  
Oracle Universal Installer  
前提条件チェック, 3-28  
ORACLE\_HOME 環境変数, 3-21  
ORACLE\_SID 環境変数, 3-21  
OracleAS Web Cache  
静的ポートの構成, 3-16  
必要なカーネル・パラメータ, 3-9  
Oracle データベース  
Oracle Business Intelligence のインストール, 1-4  
Oracle ホーム  
考慮事項, 1-3  
oracle ユーザー, 3-20  
oraInst.loc ファイル  
作成 (非対話型インストール), B-2  
oraInventory ディレクトリ, 3-19  
OSDBA グループ, 3-19  
OSOPER グループ, 3-19

## P

passwd コマンド, 3-20  
patchadd コマンド, 2-7  
PATH 環境変数, 3-21

pcAnywhere, 3-26  
pkginfo コマンド, 2-6, 3-6  
portlist.ini ファイル, 3-14  
.profile ファイル, 3-21  
Program Technical Fix  
「PTF」を参照

## R

---

reboot コマンド, 3-12  
runInstaller コマンド  
-executeSysPrereqs パラメータ, 3-2

## S

---

seminfo\_semmni パラメータ  
Solaris 上の推奨値, 3-11  
seminfo\_semmns パラメータ  
Solaris 上の推奨値, 3-11  
seminfo\_semmsl パラメータ  
Solaris 上の推奨値, 3-11  
seminfo\_semvmx パラメータ  
Solaris 上の推奨値, 3-11  
semmni パラメータ  
Solaris 上の推奨値, 3-11  
semmns パラメータ  
Solaris 上の推奨値, 3-11  
semmsl パラメータ  
Solaris 上の推奨値, 3-11  
semvmx パラメータ  
Solaris 上の推奨値, 3-11  
shminfo\_shmmax パラメータ  
Solaris 上の推奨値, 3-11  
shminfo\_shmmin パラメータ  
Solaris 上の推奨値, 3-11  
shminfo\_shmmni パラメータ  
Solaris 上の推奨値, 3-11  
shminfo\_shmseg パラメータ  
Solaris 上の推奨値, 3-11  
shmmax パラメータ  
Solaris 上の推奨値, 3-11  
shmmin パラメータ  
Solaris 上の推奨値, 3-11  
shmmni パラメータ  
Solaris 上の推奨値, 3-11  
shmseg パラメータ  
Solaris 上の推奨値, 3-11  
silentInstall.log, B-4  
Solaris  
カーネル・パラメータの確認, 3-12  
カーネル・パラメータの変更の維持, 3-12  
バージョンの確認, 2-6, 3-6  
バッチのダウンロード元, 2-7  
staticports.ini ファイル, 3-13  
作成, 3-14  
フォーマット, 3-13  
su コマンド, 3-21  
sysdef コマンド, 3-12  
system ファイル, 3-12

## T

---

TMP 環境変数, 3-22

/tmp ディレクトリ, 3-22  
TNS\_ADMIN 環境変数, 3-22  
tnsnames.ora ファイル, 3-22  
TNS 名, 4-5

## U

---

uname コマンド, 2-6, 3-6  
UNIX コマンド  
instfix, 2-7  
passwd, 3-20  
patchadd, 2-7  
pkginfo, 2-6, 3-6  
reboot, 3-12  
sysdef, 3-12  
uname, 2-6, 3-6  
useradd, 3-20  
useradd コマンド, 3-20

## V

---

VNC, 3-26

## あ

---

インストーラ  
概要, 1-6  
起動, 4-2  
使用するディレクトリ, 1-6  
前提条件チェック, 1-7  
インストーラの起動, 4-2  
インストール  
Oracle Business Intelligence, 4-2  
インストール後の作業, 4-14  
インストール後の作業, 4-5  
コンポーネント固有, 4-9  
インストールに関するトラブルシューティング, A-2  
インストール前の作業  
Oracle Business Intelligence, 1-4  
コンポーネント固有, 1-5  
インベントリ・ディレクトリ  
グループ, 3-19  
オペレーティング・システム  
Solaris のバージョンの確認, 2-6, 3-6  
オペレーティング・システム・グループ, 3-18  
dba グループ, 3-19  
groups コマンド, 3-20  
oinstall グループ, 3-19  
OSDBA グループ, 3-19  
OSOPER グループ, 3-19  
インベントリ・ディレクトリ, 3-19  
データベース管理者, 3-19  
オペレーティング・システムのバッチ, 3-7  
オペレーティング・システム・ユーザー, 3-20  
groups コマンド, 3-20  
oracle ユーザー, 3-20  
オペレーティング・システム要件  
概要, 2-5

## か

---

カーネル・パラメータ, 3-9  
/etc/system ファイル, 3-9

Solaris での確認, 3-12  
Solaris の変更の維持, 3-12  
カスタム・ポート  
「静的ポート」を参照  
環境変数, 3-21  
CLASSPATH, 3-21  
DISPLAY, 3-22  
LD\_LIBRARY\_PATH, 3-21  
ORACLE\_HOME, 3-21  
ORACLE\_SID, 3-21  
PATH, 3-21  
.profile ファイルでの設定, 3-21  
su コマンド, 3-21  
TMP, 3-22  
TNS\_ADMIN, 3-22  
グループ (オペレーティング・システム)  
「オペレーティング・システム・グループ」を参照  
言語サポート, 4-14, A-3  
コンポーネント  
カスタム・ポート番号を割り当てる方法, 3-13  
デフォルトのポート番号, C-1  
コンポーネントに固有なインストール後の作業, 4-9  
コンポーネントの起動, 4-11

## nt

---

サイレント・インストール, B-2  
情報  
インストール時に必要, 1-6  
静的ポート, 3-13  
Oracle HTTP Server, 3-16, 3-17  
OracleAS Web Cache, 3-16  
機能しない場合, 3-15  
例, 3-17  
前提条件チェック, 3-28  
ソフトウェア要件  
Oracle Business Intelligence のその他の要件, 2-9  
ソフトウェア要件の確認, 2-6, 3-6

## た

---

チェック  
インストーラによる前提条件, 1-7  
追加の言語サポート, 4-14, A-3  
追加のフォント, 4-14, A-3  
ディスク領域要件, 2-2  
データベース管理者グループ, 3-19  
データベース要件  
optimizer\_features\_enable の設定, 2-9  
Oracle Business Intelligence, 2-8  
デフォルトのポート番号, 3-13, C-1  
トラブルシューティング  
不足フォント, 4-14, A-3  
ドキュメント  
CD-ROM から表示, 4-12  
インストールおよびアクセス, 4-12

## な

---

ネットワーク関連トピック, 3-23  
ハード・ドライブからのインストール, 3-24  
マルチホーム・コンピュータへのインストール  
, 3-24

リモートの CD-ROM/DVD ドライブからのインス  
トール, 3-25  
ネットワーク要件, 2-2

## は

---

ハード・ドライブからのインストール, 3-24  
ハードウェア要件  
Oracle Business Intelligence, 2-2  
ハード・ドライブへの CD-ROM/DVD のコピー, 3-24  
パッケージ  
Solaris での確認, 2-6, 3-6  
パッチ  
Solaris のダウンロード元, 2-7  
「オペレーティング・システムのパッチ」を参照  
パラメータ、カーネル, 3-9  
非対話型インストール, B-1, B-2  
インストール前, B-2  
ログ・ファイル, B-4  
ファイル  
/etc/system, 3-12  
フォント  
Albany フォント, 4-14  
インストール後のインストール, 4-14, A-3  
不足フォントに関するトラブルシューティング  
, 4-14, A-3  
複数インストール  
実行, 1-4  
ブラウザ要件, 2-5  
Oracle Business Intelligence, 2-9  
ホスト名要件, 2-2  
ポート, 3-12  
静的ポート, 3-13  
デフォルトのポート番号の使用, 3-13  
デフォルトのポート番号のリスト, C-1  
ポート番号の選択, 3-15  
ポート番号, 4-5

## ま

---

マルチディメンション分析  
準備, 4-6  
マルチホーム・コンピュータ、インストール, 3-24  
メモリー要件  
削減, 3-5  
複数のインスタンス, 3-5

## や

---

ユーザー (オペレーティング・システム)  
「オペレーティング・システム・ユーザー」を参照  
要件  
オペレーティング・システムのパッチ, 3-7  
カーネル・パラメータ, 3-9  
環境変数, 3-21  
ディスク領域, 2-2  
ネットワーク, 2-2  
ブラウザ, 2-5  
ページファイルのサイズ (仮想メモリー), 3-5  
ホスト名, 2-2  
マルチホーム・コンピュータ, 3-24  
メモリー, 3-5

## ら

---

- リモート・インストール, 3-25
- リモート・コントロール・ソフトウェア, 3-26
- リリース・ノート, 1-4, 4-12
- リレーショナル分析
  - 準備, 4-9
- レスポンス・ファイル, B-2
  - 指定, B-4
- ログ・ファイル
  - 非対話型インストール, B-4
- ロケール
  - 設定, 1-5